連歌茶談別集

完

伊地知文庫
文庫20
250

伊地知氏書冊

連歌茶話別集跋

わが白雲先大和上の筆ぢ[illegible]

は連歌茶話を世道ゆあそぶも

のかたくに初て発形[illegible]さん

よ拙乃たゞ[illegible]めかうゝ地書ゆ[illegible]

文庫20
250

やうなる後續殘の世をうかゝ人々
はゝ事なるまでに樺ふのせゝた
此別集をも松やどゝ名付ふ
ものして是非乃世につゝく
まゝ志きよりそゝけり此内義

志にはいとさのゝ中に云
いとゝ物ほしるまでいうでう
東に解義よりゆまばずきり
とても老だしゞ者まゞ美者う
に宇津志ゝうりて松屋けざゝふ

やうに聖道の世のむ人々
乃書発すべきのぶ思ひ形を
仏教やうに仏法をわざふ女発文政
八年三月朱雀
三人ぐ法師龍肝志形歩

連歌のよりて来るすべて
ゐるをつくのいくらを
かつよくかふ了はそもいも
ちんある一条さしるくるるきく人
うこの年末をものこと籠を治へ

て峠にのこれの庵ちきにいる
ゝ山ふかうこゝて泊瀬よいまて
うゝ水参相者ちゝ山もゝ
野ゝいゝき池奇の郷ゝ
いゝの花ようゝいゝもの

年ゝ世道をいゝて名ふ
ゝ夕ゝまゝこゝてゝゝいゝ
ゝ十ゝ七ゝ月ゝ中のうゝに
ゝういゝもゝゝ連歌十
ゝ百句ゝ連歌発句六句ゝ

世々きこえる句をえらびて探題
の題をたがへいらしめ連歌
百韻同茶碗をいづくの新
宝つゝ打ものして野道の茶碗の
しるべとなるべし

つゝまるゝ言をとゝめて待者をして
きこえんかとやつれ年ハ去ら千
ちらでこそとてくゝりなく
くの花のすゝ道をつゝ
ゝるべきいらぬ花のも

ふるさとの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

又政世きこゆる庚辰の[illegible]

春月[illegible]の日[illegible]

杏花園[illegible]

[illegible]

○

平家物語第六巻ニ曰白河ノ院より祇園女御のもとへ御ぶみをまつるを忠盛よくだされそうそ其のちに男子をうゝ給りある時きゞもそをぶゝいくらもなそ事るぬゝごを袖にもそをつゝれ御前へまいそかしこまりて

帝室博物館蔵書

いもゞ子きちふ程よこそなるまにられ
とヤされまりろれば院やゞて御こ〳〵
ろえなりて
まゞもるまとりてをしなひよせよ
とぞ付させまし〳〵くあるはわゝ君あ
まりに夜なきをちまひしゝゝば院を
こしめして一首乃御詠をあそばひて
ぞくゞされまる

夜なきをとゝまゞもるまたてよまれ代よ
はよくさかゆることもこそあれ
それよるまして〳〵こそ清盛とまなのられ
まれといつり
案ずるに此連歌和歌のこと盛衰記此
六れ打もむきまる今と異なるといへど
も和歌乃姿も連歌れんも同じ様なり

源平盛衰記第廿七巻ニ曰右大將家ハ
京のぼりの御ともにさゞみの國まり
こ川をわたりたまつりくるるにかぢも
ら少用ありて片方にとりぬつりある
ゞ御ともにさゞなぬと一むちなりて
うりゐどにこ川の河中にてもせゐき
たてまゐりまりくるに沛艾(ハイガイ)の馬にて
鎌倉殿ニ水をさゝと蹴うけまてまゐ

りて御氣色ゆゝしくてきとにらをかつり
たまひまりくるニ梶原

まりこ川あれむそなみいあゞりある

とつゝまゐりてたゞなをゆりをくへあ
れバ御氣色なをりまひてあれむそ
なゝいあゞりあると二三返えいゝた
まひてむかひれをしにうちなゞりを馬
乃かゝらをゝぢはらニ引むけて

かくてはのしくも人やゝるらん

と付たまひるるといつり

案ずるまある人の話にむゝし飛鳥井

殿まりこれ驛まて草履をかひたまふ

時はるさひの者ゝれゝゝく

まりこゝやゝれの者たゝくゆのふらん

とロをさひ者まひゝれゝゝぎいゝんた

つまの〳〵中まりかく

あをかひ者まへさはまはるをく

と付者るをさと云云いゝれもたを志ろ

はこことなり

○

古今著聞集第五ゑ曰基俊城外〳〵ある

事はるゝりゝに堂はあるまむくの木

あり其木に六歳斗なる小童のゝりて

むくをとるをてくいゝるにて〳〵をゝ何

といふぞとゐるまれば座しろ堂とやと
答るを聞て基俊なにとなくはをさ
みよ童にむらひて
これ堂も神ら佛うれぐりか 昭
といひまりまれべころ童うちきて
とまもあへず
ほうしみこよぞとふべかまろる
といへまり基俊あさましくふしぎ

に覚てこれ童もまぐものよいあらず
とぞいひまる
み曰いろはの連歌あまろるに誰とか
やゲるよ
うれしかるらん 千秋萬歳
とまろまろるよは次白にぬ文字よや
つくべれまて侍るゆゝしき難白にて
人くあんじわらひまろるよ小侍

従つけ侍る

ぬるこよひあるをへ子乃日とかぞへて

巳上

○

吉野拾遺第一ゑ曰神無月比比當今人〻めさせ給ひて御ゆゑのつゐてゑ我朝乃うたゝ古今集後撰比比風骨ふゝくえならぬ歌仙もあるをそらゝ其後いみゝ歌あまる撰集ゑみえまり濱比まさごはいふめれといをゝろうたゝみなれたるゝあうたなることのゝいとめづらゝからす應長比比より連歌をもてもやゝていうめゝきゐなどあまるつゐるものゐるゑ朕ゑりくゝれををて遊びぱりどゝ歌をよそゝて連歌をのゝ深く樂ゝめりこよひ人〻も発ゐ

などつかふまつりてんやと作られて
遊させたまふ御句なり

月やさるありあけの夜乃夕ぐれ　親房

みいといとうかなしき御んを
せくふるもさらなる時あれ夜どう哉

御ニなあそむしゝ免給ふて人ゝもつかふ
まつらしめ給ふ

ちれどさぬ独もあらしれ和哉　隆資

花をさへ忘れぬ風乃とみぢうの　實世

色こゝろあらしにちかき落葉哉　親房

落葉せし梢よつもる嵐かな　女房

此外數多めづらしきなどもなるつれ
ども完来なくてかたをらしつといつり

南畝莠言上ゑ曰

世よふるもさらに時あれ夜どうの　宗祇

世よふるもさらよ宗祇やどりう雨　芭蕉

は二句人乃ちる所なるを按ずるに吉野
拾遺後村上院れ御句なる
　世〻ふるもさらに時雨乃屋どり哉
この句人れちるものまれなるといつ
　○
落書露顕に曰先年梵灯僧の鎌倉に侍
りるころ関東れ上手にて信夫といふ
人乃発句に

　雨ふりて露なきさまの嵐哉
　雨ふりて露なきさまの松乃あらしかな
芭を愚老に向る人乃侍りしハ
　雨ふりて露なきさまれあらし哉
と中せるを按ずるに信夫ゞ句もさし當
たる道理にて上手と申えき梵灯乃句
も一節ありて殊に勝せる有人の侍り

しゐるゝ〜てなれば松は嵐を吞とゝく
て露なしとゝ〜るたくみなる句なる
三句ながら一理乃叶まるにてゝるぬ
同ん同句よてふくもあるべうるゝり
と存ゝめ以乃事ゝその句にさし當て
意得べゝことなりといつり
二言抄よ曰謹和歌所の人〜御中にや
抑詠歌にうゝ詞とたゞ詞ものかゝる

めゝいうなるを可申そや今時地下れ
連歌よ近浦近嶋言霞など様の自由乃
事仕ゆゝ遠浦遠嶋夕霜などゝもや
うへいそれを引歌よてをさへてやゞ
にゆこの類れやくゝきこえゆなり和歌
も若れ以のをさへゝる詞をゞしたゞ
詞とも可嫌ゆやらんといつり
辨要抄よ曰凡撰集に入らるゝ事い三

れふこれあるを一まきを上手人二まきを重代乃歌人三まきを代乃に執んふうれ人これ三の外乃人へ入られざることなりといつり

○

小夜れ祢さ免ま日連歌といふことを歌よむ人乃ぬむことになれまを也もいうゞとぞ免ゆる爲氏卿へ日本乃ものゝ

上手を唐國へつゝはされゞ我身を連歌の名よてや人れ國までもわゝるべきなど狂言ヤされるとかや後鳥羽院乃御代まを連歌の上手をゞ柿れな の衆と名付られわろれをゞ栗な乃衆と名付られゆりを柿な れ長者となることとなる嚴重れ事ぞゝ同じれ御時と祢ぬもの百れかまものゝ れるも定

家卿も四十とられまするとぞ日記ま
ゐる爲家卿も齡たけてい歌案じつゞ
くるもむげうしきとて朝夕連歌をの
みせられるとぞ聞りし後嵯峨院は
御代まも辨内侍少將内侍などいひし
女房連歌しにていとはへくしき事
どもゐりきはごろ地下にのも翫こと
まなれるいと無念なるわざなるを連歌

乃こともも歌とたがひらべまぐ歌の
あうにれもあるきるどもくせられば
れば子細なるまぐれまも歌は毒とて一
向にをてられゐるも昔はいたがひを
る事まこそ詩作る人の聯句嫌こともも
いまぐなし何とて歌よみの連歌をぬ
みゐふやらん初んのれまこそ用ん
もゐるべるれにもんもさぐまるをまらん

人乃連歌にとられきまふことやハあ
るべきといろり

○

二根集第一巻ニ曰

つゝをるるもあきあれなり
といふに

なぐらぬ筆れ命もたしかれや

名号連歌ハ時ハ付白紹巴も昌叱も同
じくほ免られまりとるをなしり乃連歌も
かあるまあれバ面白きものなり硯ハ
銘に　硯命以年筧　墨命以月筧　筆
命以日筧
又曰宗長云連歌ハ一貫文の扇ハふる
ハより百文乃扇のなるらしきごとく
せよとヤされしなるをハものがるを常と
発句なも付合なも意得あるべし

同第二巻ニ曰宗祇云長歌のをゝ反
歌あるものなりそれハ前ハ長歌乃こ
とゝをいひきれるものなり連歌ハ
付句ゝ反歌の面ゝにきゝ前句ハこと
ゝをゝたてゝゆくものなり又曰

千ゝなるき木霜ゝ乃そ
とゝふ句なるニ
あはで誰あゝつハ深くかつるらん

宗祇竹林集をえらばれしゝ時第子衆へ
をのゝく面白と思ふ句を書出してえ
せよとありしゝが兼載ハ連歌をつか
まつられバ竹林集ニ入られず祇公云
よひに帰るゝあもでかつるゝもいはん
暁ニ帰るをハはでゝつるとゝめゆと
なり同第三巻ニ曰
山ゝみどりハ春ふゝハいろ

といふ句に宗祇付て

かをみこぐ海士乃釣舟とを江江

此句を我もとらずと出い句となる前句

へもあながちもひまなる事もなし

上手乃志わざ自然れことなり色をれ

句ふ色〳〵又曰

かならずれんとらるこのゆふべ

宗長云れもとろた大事の前句とて宗

牧周桂へ付させられまり周桂云

のちれあ〳〵た乃一筆れあと

宗牧の句をわをれまり宗長云

ならをぬ人ゝ何まるらん

かならずれ付様れもとろ〳〵く

又曰宗祇追善れ宗碩乃発句よ

ろふでかる花もとろれよ萩乃露

宗長云萩をとろれや色れ物なれバとろ

ほれ邪とせばよろしかるべしといへ
ども宗碩云今日半ばを去られよとゝふの
哀を萩よまうせていふなりといへる
いづれも上手れ自作なる牡愚案肝要
にい
又曰周桂云連歌も伊勢物語源氏物語
等れ面白き古歌乃風躰そのかぞく
をとりて付い得べれもよろしなる

ものあまりに付過いもよろしからぬこ
となりといつり宗牧云連歌も前句へ
よくつゞんを免なり付ざるもよろし
からずといつり宗養云連歌もいひつ
ゞるもわろしみうれたるもわろしば
二乃中に大事いともれなといつりい
づれも名匠れものがたりなり
同第四巻又曰智溫法師連歌の学問れ歌

わるくよあしをすてるんのならべ
後悔ろどの学もんをす
又曰肖柏は連歌をかきとらるる歟なり
宗長のをぬを通るをるる歟なり宗碩の
をゆふなる歟なり宗祇のをいべれは
歟をもかねをる
同第五巻又曰戸をたてしに戸はあ
とよるあかりはさしをれば兼載十七

八のころ岩木殿いひかをたまふ
戸をたてこそあらくなるをれ
とやされしを兼載とりあえず
をんをんの九つまでを血もをらで
と付をり小侯は時より利根なるもの
とをる
又曰宗祇存生の間は祇公は姿を繪に
写して画賛を所望しをれば宗祇法師

うゐをく我かげながらあのうさを
ふらぬ翁ぞ浦みれぬる

巳上

案ずるに秋里籬嶋が名所圖繪に此歌
を載て辞世なりといへり續編に出を
ゞごとし

○

阿多物語上巻に曰まゞうぐみの名を
まる鏡あさ鏡などいひて和漢ともに
をてあそぶ五月(サツキ)に鏡を百錬(レンキヤウ)鏡と
て紅中にて鑄(イ)たる鏡なりしにそゝろを
江につなぐ舟乃中にてむらしまれ
みゞく五月にうぐみなりまん
とよこしをいたれある事なるをつ
こ乃鏡をくさられ人のみことになり
し鏡なり野守(ノモリ)の鏡をむらし雄略天皇

れ御かゑし給ひしはるのことにこそ
て野にある水をはしたゝ乃野守れ鏡
といつゝりゑ徐君ゞ鏡を人のんれうち
をてらせバ世乃人こゝをてほしがる
ゝれバわゞ君とゞる事ならゞとやつ
かゝ乃ゝへうゞゝるを野守の鏡といふ
ゝもゑ野をまもる鬼れ君まる鏡あり
ゝれも人のんれうちをてらしいみし

れまゝうちなれバさる國王ありてハ鏡
をめをに鬼乃れしゝみゝれバ野をゝゝ
はらちんゝし給ひしゝ時ちゝらなくし
てゝゝりしを野守の鏡といふゝもゑ秦
れ始皇即位乃ころ深夜ゑ一乃鬼来て
一つれ鏡をゝりぬわゝり三尺ゝゝこ
れゝ病人れまへにゝゝれバ六勝五臓
みなことくゝゝあらゝれやまふのあ

まどころをきれまを野守の鏡といふ
ともはかせかしくあれどいげれまて
をれもんぞる物まてかろしむる物に
きあらずこれのみならず神代まの素盞
雄のみこと出雲國へはたしまする
まの手摩乳脚摩乳といへる夫婦は者一
人乃姫をもてるまいちまぐ姫とまなづけ
姫を八岐乃大蛇ありて今夜のかれん

とうまなしむそのとは素盞雄みこと
は姫を我まえさせば大蛇をたいだンと
べしとふうく約束ありて程なく大蛇
をたいらげ給ひて稲田姫と夫妻は事
いやくし給ひしは時わるまを八すめぐり
二尺四すは鏡を聟ひきで物ままいら
せうるを素盞雄れみこと天照太神へ
まり給ふ懿德天皇は御代の時人皇へ

ゆゑ(ナイシ)ありて今乃内侍所(ナイシ)に御鏡うれ
なるを其後崇神(スジン)天皇に御宇にいあらせ
給て始の古き鏡をバ天照太神へうへ
しまいらせられあさらしたを今れ内
侍所にたさ給つり此外八咫(ヤタノ)鏡とて
天照太神乃いさせ給ひ給る鏡二つあ
るはしめいさせ給ふちいさたを紀伊(キイ)
國ひさたれ宮といたをれ給ふ後の御

鏡を伊勢乃國蓋見(フタミ)ヶ浦にたたしまし
ていづれも此國のまぎりに神とをり
給ふうれびたとこ女にあらず此日
本をを名るいきとしいあるものゝた
から物を鏡にたまれるを又生をうく
るものゝ親をも者ぬるなり
人の子をたやよ仰るてふなるものを
意しきぬいうくみをぞ考る

と古人もいひしゝ鏡をいやといとゞ
なゞてたやのたもうげをもえ侍らん
や不孝れつみもあさましゝ此外鏡乃者
からなる事たゞ一日をうさねていふ
ともつたざる事なるを
又曰はとゝだをもむゝ蜀(シヨク)れ國のみ
うど御名を杜宇(ウ)とやまれる蜀乃都を
いで旅よてみまかる侍ひ其御魂魄(コンパク)は

とゝだをに化し侍ふるとなりても國
やこひしゝくまん不如歸(フジヨキ)となる
さて旅人までを我方へかへらんよい
ちうゞとゝ免侍ふみを郭國(クワツコク)といふ
國れ王他國よて遠行ち侍ひくゝれかう
くゝも不如歸(フジヨキ)ゝゝくゝも啼侍ふと
いふ説もありよ又四手(デ)れ田長(タオサ)となゞく
ともいふ

いくばくれ田をつくれどう郭公
志でのたたさをあさなくよぶ
とよめるは歌せりくたり志うれ
ども四手乃山より卯月さ月に来まて
農をもくゝ考て過時不熟(ノウ ジフ ジユク)となくゞほとゝ
だをとゝきこゆそれゆへ四手れ田長と
いふとかゝる物あるさもありぬべき
事やうは名死出(シデ)れ山ゆりなるといふ

いそれを古へよりいひつたへ来る事
あれどもげそれゞのこゝ侍りうは名
を詩歌(シイカ)ともにをてあそべまを或ま

一 聲(セイノ)山(サン)鳥(テウ) 曙(シヨ)雲(ウンノ) 外

とつくまをゝ
二 夢とさうずもいでゞ郭公
いく夜あかしれとまりなるとも
なゞゝなが名をのこされ侍る

又曰七夕をいふ〜へ遊子伯陽といへ
る人烏鵲(ウシャク)れ二つをうひ給ひ〜なり後
夫妻の人天るのぞりを牽牛織女(ケンギウシヨウジヨ)乃二星
となり天れ河を隔て住給ふ常を水を
ぐれ有とて此河れわたをゆる〜た
まゝず七月七日を帝釋善法堂(タイシヤクセンホウダウ)へ行幸(ミユキ)
あ給ふ日るて水あび給ふ事なられば
二星乃わたをゆる〜給つり其時む

らしれちなみをわたれずば多来て翅(ツバサ)
をならべて橋となしてぞわたしるる
われの時七夕血涙(チノナミダ)をながし〜たまへ
ば翅をみぢの色るまがふゆへ烏鵲紅(コウ)
葉(ヨウ)れ橋ともいひならせり
同下巻に曰占方るもなくありか
免れ占くし乃占つゞ占うど占ときれ
占ゆふぎらふ占はい占みちゆれ占ま

ち占あ〳〵占い〳〵占ろれ占うた占
などいふあり又山をゆ占られも山を
ゆのもをむをびあはせてまさそのを
ゑをかんなぎにむををせてうらなふ
事ありといつり亀れかう乃占も卜部
氏れものはわゝ乃木をもりて亀のかう
をやれてうらなふ事ありかるぬく占
られも志ゝれかさ乃骨をやきてられ

もはわゝれ木よてうらなふといつり
むさ〳〵のようらべかるやれまさてにを
いのらぬ君ゞ名うらよいてゝり
などよ名つも又天照太神岩戸にこもる
ゆひ〳〵とれ天香来山れ鹿乃かるのほ
ねをぬきてはわゝれ木よてやれて太
神乃いて給もん事をうらなひ〳〵とな
つも又俊頼れ歌よ

神風や三角乃柏にこそひて
きみをま袖よつてみてぞくる
是も伊勢太神宮にて三葉うしはをと
まてなぐるよたてばゐふ事かなひ者く
ぬきうなちぬなりきみを袖よつみ
てよろこぶなまみ續古今れ歌よ
たもひあまりきみのかしたにとふことれ
きみむようくいなみざなまろり

とよ名り是もかしたを水ようかべて
きみめべうなはずうかべべうなふと
きることなりゆゆいろくれせきあ
れど志ぎろれべのこし侍るといろり

○

往生要集第六よ日それ人間も業と果
とたしうきまて生所あひ爲ぐまつ
れべ六道のうちその人も今もいうな

る生をうけていづくにありともさら
ざるなり野乃あざものゝ山れ多を誰か
さたのせれやなるとわきまへしらん
や古歌よこのゝをよみ侍るにや
ころくとなくゝ山田れほとゝぎす
ちにてやあらんそくまてやなら葉

巳上

案ずるほとゝだをも不如歸ともな

き郭公ともなき過時不熟ともなくと
いふ説もあれどもころくと啼といふ
事ハ此歌よりてもゝ見て見字せり若し
くも過時不熟を義訓してころくと
よむにもやあるらん更よ見ぬ所し

○

誹諧破邪顯正ゟ曰それ天竺れ靈文を
唐土乃詩賦とし唐土の詩賦をもつて

我朝は歌とされば三國をやそらげまるをもりて大に和くとかさて大和うたとよそりと白樂天乃謠よあるを以文言人間の作にあらず住吉大明神は神詫なりうかと意得ぬれば何事もたはことよなれを和歌灌頂神道灌頂といふ事あり是にはなりうらざれば神秘乃まことを人のもる事よあらずうく

いふ我も忘らずまうれども太神宮岩戸にとぢ籠を給ひしを八百万神なげ紀給ひ神樂を奏して舞たまふ其時面白やとの給ひて和光の御かぶ顕れ日月出現仕給ひ常闇は國二度照したまふ故今は世までも日本をひらきたを其神樂といふい和歌なりされば神祇とて定れる歌なり和歌をもりて神祇と

をば和歌二つよりて連歌とを見則二
柱乃神斯外宮内宮天地陰陽日月君臣
父母は妙躰なりさるに依て上乃句も
下は句も一るくくはひとりぞちせね
べ連歌といふものはあらず天も天地
も地君も君臣も臣別〻乃各式をのら
をとはわうちなるさはも天地くらやみ
なる連歌も詞花艶葉まて下愚の輩

たやをくまなびがたはよりそれく
生つきは世俗乃こと〻取もなをさず
乃理をいひなぐさむ見を誹諧とをる
詞もかもれども和歌も連歌も誹諧も
毛頭うはる事なす乃理かもらざれば
妙理も又同じ中なも誹諧も大きはや
もらだまるそのうへはやもらぎなれ
べ見を和光同塵は神斯といふなり爰

をもひてゐるべし〳〵天下泰平にわたさま
ゐまへる事いたゞ和歌の明徳なり
正乃れことも濱乃真砂れうゞとなれば
などゝいひつくし〳〵何ゝ古き事のあらん
古き五文字をたとへば月夜よ〳〵とあ
るを月やよ〳〵月もよ〳〵月いよ〳〵月よ
〳〵やなどいひゝへても各別れんかた
れり異様の新〳〵れるよりも實方れ傍

古めゝ〳〵き発句まさりてゐらし〳〵
くきこゆるものなり花も春毎よひら
れ月も夜ごとにくまなく郭公乃毒ゆふ
べれ鹿を聞て万木千草幾年くゝふる
といへども更よかゝる事なし〳〵花もち
まてゝ又され月も入てゝ又出る各別
乃花もさゝず異風なる月も出ず愛れ
毒言の色古今同じものなり此付合み

な古〳〵とてさらもんやを間ゝ有ふる
誹諧乃材木もみな古人のこぼち屋な
るをそれを拾ひあつめて新〳〵くとりつ
くろふを作意といふなる先達好士れ
伺も古くしてんを新〳〵といつる名
言隨分わもれまゞを事なりといつり

○

石山紀行ゝ曰去年れ秋乃比源氏物語
の事などもれうれ物がまり〳〵て八月
十五日石山寺にてゝれ式部ゞ筆をた
て〳〵昔れ事或説ながらゝるをつをへ
たるあもれ通夜〳〵てかゝこ乃月ゝ侍
らでやとヤて既ゝれもひをちゝゝど
もさもる事ありてむをゝく過〳〵侍を
れ事を金后をこゝ免〳〵つけてさらば
糸侍あるべれゝ〳〵なるを来この物語

よふ事を給ひて蓬屋に日くれをしま
して後ゝ一部の功をとげはてゝまし
てゝりゝ又宗養法師紹巴法師これも同
聽ゝ輩なればいざをひ給ひにいるづ
らゝ日城をくらんもんうしかの源氏
れ間ゝあゝ事ゝ十百韻れ連歌をと
ゝせしゝゝべ不堪のうへ老懷いうゞと
れもひながら驥れ尾につくべきす

ゝせしゝゝちゝべ発句ゝ題ゝかれ
物語の目録をとゝて若菜れ発句をゝ
出しゝ侍しゝゝべをのくゝそのんをれも
ひめぐらしゝ十れ発句をさだ定てこと
しゝ天文ゝ四年八月十四日にれもひを
ち響をならべ侍る千種れいろくを
みなへしゝゝ色ゝまゞへる粟田山うち
こえゝるもゝらぬもきちゞまる相

坂れ関をこえうち出乃濱などをぐる
ほどゝりをゝくゝ乗物をゝへ〜かれ
御寺にひゝ〜ぢの時ぢかまつきぬふ
ゝくものびてとゞやさだ免て行さた乃
宿坊などかねてゞやさぎむる事もなく
て玉藻刈ふくゝぎまよて寂中の月も見
るべきよ〜ゞやてを寄りつれてかの源氏
乃間まて足をゞやを免さてゝ〜かゝ〜こ

坊などゝ見るに世尊院とて志くるべ
き坊ゝる人ありてを〜へくるにまゝ
まてゝ見めぐゝ〜ゝ事るまゝなるまにぎた
〜てよゝ〜た所なれど海山見やらるゝ
所まあらずいゝぐとて又見なるまさ〜
に倉れ坊とゝやいへる月れ者免まゝ
いゝぐなる名とれぞえ〜曾子ハ勝毋
れ里まゝ車をゝへ〜漢高祖ゝ柏人まゝ屋

とりをとらざるたゑしあれどかの貫之がきみ野乃嶋れ名るきうくれぬともあれびたち入又佳るに東ゑ岡山あるふもとき湖水いろこたいねども又わさされて額よきを洗月とかるを又一休老師江山一覧と題せし墨跡もあり江山景氣云の紫及びがるし後普光園摂政れ月き山風ぞ志ぐるとあり連

歌の會席もし坊とぞ中侍へるるこ
にをぐる所あらじ四美備まる所れさ
まるてし所とさぎ免ろる大るる千日
などの會席し比乃風をしてわげらを
しき事なるしうどられきし四人れん
ざしむうしの商山乃跡を尋ね薇など
ばうりにて日茂をくるぬべれを金后
の御さたこしてこことゑぎさくしくな

まぬあるはゝ坊よりを御まゝなひゝな
どゝてはもひゝにきたゞひて十五日
よりえゞ先日毎よ二百韻づゝよて五
日にことれへぬ執筆よゝ理文仍景い
づれもんざゝ乃人なりゝをかゝらひ
ゝりさても夜をへての月れちゝ紀年く
にこえまる清光まことに薩埵の光明
もそひゝるにこそとみえゝ明る日ゝ

一日逗留をべきよゝて世尊院よて
百韻の連歌ありゝ廿一日舟よて還向ゝ
ゝるよ奥遊ことにさまゞくなよ舟よよ
あゞりてゐよあひてゝろゝくにゝ
まつゝみゝてきちわゝれゝりこれも
盛者必衰れことちよをのく感ゞ
あつよといつゝ
案ずるよ木曾路名所圖會第一巻よこ

れ紀行をのせまるを

○

かどゝも産衣よみえまれども委しゝ
らず山海名産圖會第四よくたしくろん
じて細書六七葉に及べを其中のこ
ろを採摘して云かどゝいふ名も古
き和歌物語等よろることなしまぐ連
歌乃季寄よろるのゝなり其餘俳諧れ

季寄三才圖會大和本草等にみえまり
按ずるよ河鹿(カジカ)れ名目も俳諧師などの
口ぐさみよいひたゞ免て恐らくハ寛
永前後の流行なるを西行れ歌などく
いへるを作て出して人に信ぜさ物し
まもあるべれ既に俗傳よ西行更級に
住るゝ時よよ名ゝとて
山川よ汐れみちひゝもられゝり

秋風さむくかじかの鳴なる
是何れ書より出せる歌ともおもはずや萬
葉集の歌なりとて
山河よ小石なゞるくこころくと
かじかの鳴なる谷乃落合
是萬葉集にあることなり或説より落合
れ流をよみて大原に建禮門院乃御詠
なりと云傳ふも何の書よりのせるとも
おもはず再考をくるに加茂真淵古今打
聽より云今れ俗にかじかといふものを
いにしへのかはずなるべしと云云愚
按ずるにかじかといふ名を俳言より
て歌によむことなし若しよまばかは
づとよむべし萬葉集に
わもろこずるさまなる君を佐保川の
かはづなくなるせでらへしつるかも

又長明無名抄よいつる井堤はかちがえ
色なるべし田野陂澤よをみてうたて
かしまし此蛙よりあらず後世もめ
でらさるものをのそよむはいとへ
れ歌をもらざるなるべしかちがなく
吉野川かちがなく六田は淀かちがな
く神奈備川かちがなく清河原などよ
てとゝく山川の清流よのゝ保合せて

みな夢を見でしものゝ考えはづる
なり田野陂澤はものを使まること萬
葉一編よあること井堤をよむも
古今集にみえて六帖よも載し歌なま
かるゝくかゞゝもかちがよして名も
俳言まることを考る歟し諸國よかゞ
うといふ魚も品類をくなからずゝ
ちは大小いろは黒班等少くづ遠ふ

なる圖ゑ十種を出をゞごとゝといつり

○

鎌倉志第六ゑ曰昔建長寺れ廣德庵ゑ自休といふ僧あり奥州志信ろ人なり江嶋へ百日糸詣しるるに相兼院れ白菊といふ兒ろれも江嶋へ糸詣しるるゑ自休邂逅してぎりいうもして忍るるづき便をいひろれども其返事だまなくしてぜんかるさまぐいひ字をれゞ白菊

嶋へ行扇子に歌を書て渡守を乞て我を乞る人あらゞえせよとてかくなん

白菊とものぶれ里ろ人とものぶ

ろひ入江ろ嶋とろゝへゑ

又一首

うれことをろひ入江れ嶋かぎに

捨る命も波の下草

と詠て此淵に身を投きり自休弱来て此事をなかくもひつゞけるる

懸崖嶮處捨生涯

十有餘霜在利那

花質紅顔碎岩石

娥眉翠黛接塵沙

衣襟只濕千行淚

扇子空留二首歌

相對無言愁思切

暮鐘爲敲促歸家

又歌に

白菊乃花はなさけの深き海に

もに入江乃嶋ぞ嬉しき

と詠て其まゝ海に沈とゝなん右は詩歌も滑誓詩文に載きるといつり

○

觀鵞百譚第四に曰定家卿は小倉色紙百人一首と號して和歌の乃最上乘(サイジヤウ)を其自筆の色紙今も直千金なりをに付て異說あり老人雜話といふ物に載するも近世まで伊勢は國司北畠氏に屛風一雙に張て全くなりしを宗祇法子宗長勢州に至し時國司ををたえ事に其意も乱世なれば其國も危く兵燹(イセン)は恐もなるゆへに名物をまんぞるなに宗長其旨を會せずして去るに辭して一雙(セキ カタヘ)を受てさるぬ伊勢にありしも果して燒失せり宗長が五十歳のとき世に散て今乃宝となれに紹鷗をを得てあまは原と八重葎を表裝して二幅(サウ カケモノ)とせるとうやに一說に百歳東野

州まで段々伝へあれて然る伝等子宗
紙認をるにより五十歳を与へあ
て宗祇又我門弟又一枚づわうちて
自ら只一を残せる野州にて感発し我
方れもみな人又頒与へるとなり知
慎れも〳〵後の説なれば百歳皆世に
散ぎるなれば有るべきもれなり今
乃至てをくなをそれば前乃説ぎう

る爲ぎをといつり
集古十種又曰定家卿真蹟小倉色紙
こひをてふわうないまるれ者ちよろ
ひとぎれをこそれもひそ免しう
あさちふのをの〳〵ぎれたらぎ乃ふれと
なのまるてなとうひとれこひし〳〵れ
さひ〳〵さにやとを者ちいて〳〵なかむれと
つりこもれたす〳〵秋れゆふられ

こぬひとをまつのうらはゆふなぎに
やくやもしほのみ身もこうれつつ
きみゝたゞれしらさりしいのちさへ
なゝくもか那とわもひぬる哉
君ゝをゝ春乃野ゝいてゝわかなつむ
我衣手にゆきをふりつつ
世中ゝみちこそなゝれわもひる
やまのなゝすもゝかそなくなれ

やゝ屋むくらゝゝれる屋とはさひしゝなる
ひとこそみえねあきはたにゝれ
きゝれをゝもゝるひとゝせんたゝさこゝ乃
まつもむかしゝはとをならゝ那くに
これやこはゆくもかつるもわゝれつつ
ゝるをゝらぬを相坂乃せた
きゝゝさこのたゝへはさゝらさゝはゝゝる
とやまゝゝをみたゝをもゝらなむ

わをらるゝ身をはわもたすちらひて〜
ひとのいれちゝわ〜くもあるか郎
夏ゝ夜いまゝ宵なゝらあゝぬるを
雲乃いゝこゝ月やとるらむ
えゝ〜のゝやまのあゝたゝせさゝふけて
ふる郷さむくこゝろもゝゝなる
あひえてゝのちゝろゝろゝくらふれを
むゝ〜はものをわもゝさゝりゝる

うかゝゝるひとをゝゝせゝゝたゝ〜ゝ
ちけ〜ゝれとはいのゝらぬとゝを
ゆゝらのゝをわゝるふなひとかゝ浅たえ
逝くゝゝをゝらぬこひゝみちゝゝ郎
をくゝやゝみゝねゝゝをゝゝゝろあゝは
いゝひとゝゝひゝみゝゝゝなん
有ゝゝゝれゝなくゝみえ〜ゝゝれゝゝ
あゝつゝをゝゝゝゝものはゝ〜

百しきやふるきのねたれ志乃ふすも
牡鹿のまりあるむ〻しなるらる
あもれともいふ魚きひとはねとほえて
身乃いさうらよなるをぬ魚きう郎
わきれしのゆくさをへまてはかさられも
ゝふをうゑりれいろちもか郎
きまものをよたえなはまえねなうらへい
志乃ふることのよもるをとそをる

いすしへの奈良乃みやこれやへさくら
ゝふるれへまにゝひぬるう郎
花の色はうゑにをにゝなるつらよ
わう身をよふるなか乃せしまに
かくとたよえやもいふきれさしも草
さしを志らしなもゆる志をとひを
あらしふくみむろ山乃もみちゝく
きりたのうはゝすしねなりゝる

田子の浦よりうち出てみれば白妙の
ふじの雪うねにゆきはふりつゝ
朝ぼらけ有明の月とみるまでに
よしのゝさとにふれるしらゆき
見せやなを雪まのあまれそてたもと
ぬれにそぬれいろもかはらす
あまのとらふきさけそれいかをうなる
みゝさゝ山にいてし月かも

きみゝ雪見るの野にいてゝわかなつむ
我ころもてにゆきはふりつゝ
ちはやふるあらしにはゝゆきはらて
ふるゆくものは我身なりけり

巳上卅三枚

此色紙はその家くゝ重寶にてなゞ
く信へしものなれはもとより優劣は
論なく及ばずまいて億見の取捨をべ

さ事にをあらず書ぐ温古れ書ものに
なさ舞とてうるにあるぐひて収入を
ほのゝといつり
案ずるる群書一覧第六巻れ雑書部る
集古十種乃略目録を載まり巻その一
なるを

○

東遊雑記第十九巻る曰

みちれくのそと乃濱なる呼子を
なく船る夢いうまふやをかゝ
前ゝ太平記まを呼子を鳥れことに
てウタフを呼こ云ヤスカタを答ふる
夢まて毋を乃をにてウタフとなゆば
雛の巣れ中よりヤスカタと答ふその
夢を相圖る毋るをまりて餌をあ

後人をらず

まふとなり和漢三才圖會まを呼子をも鷗に屬すして水禽乃部と記しまり藻塩艸といふ書まを此を古しへい伊勢に國乃海濱にをみしまるまして子を砂の中にゝくしてうみをく拔土人さゞしに取て太神宮に神供ませしとなまを又遠近のまりをもまらぬ山中にたゞりゝなくも呼子をまゝ郎

とよみしに歌より呼子をまに倍爰とていろくゝ乃埒もなき事をいひ倍ふことあまを馬鹿らしに記事をなんのゝれとて穿議をまを今に在乃風俗まて傳受物くくくといふも日本流なりみちにくのそとゝ乃濱なる呼子をまなく彫る事ハうまふやをかまと復しに外濱迫も目出度御代なりと在を祝せしまよみ歌を

る屋〳〵といつり

又西遊雜記第七巻ゑ曰太宰府天満宮
を普く世ゑまる所れ大社ゑ〳〵て社堂
乃綺麗なる事美をつくせ〳〵御普請な
ゑ社前ゑ飛梅一夜の松なゑ宿願れあ
る人を連歌乃奥行を〳〵て神恵を感光
なる事なり當社の古例ゑて百韻を興
行をるゑを金子五あ五十韻を三あ一

打を壹あと直段ありて其日ゑ至れば
別當社僧會集〳〵て懐紙を徳て神前へ
奉納〳〵施主へも酒を幸なり色を大神
樂れ代ゑなりといつゑ六月十七日ゑ
をかされ乃連歌といふなゑ御朱印の
社領を千石なり外に福岡侯ゑ三千
石の寄附地あゑて都合四千石なり東
都東叡山に屬せし〳〵社頭ゑ〳〵て僧坊五

十六院三大宮司八祢宜三役寺等なりて
明れ薩大錫ゞ社へ奉納せし詩なり
とて或人所持を
無常説法現神通千里飛梅一夜松
萬事夢醒雲吐月觀音寺裡一聲鐘
明れ洪庠ゞ詩ゟ
日本曽聞北野君愛梅満酒又能文
謫居西府三千里一夜飛香渡海雲

土人れ物語にいりの比ゟやあるをん
飛梅乃白ひぬなるを見し毎業を打て
家にゝつり續木せる人ゝ或夜の夢ゟ
なさをなく打人つらしわゞ宿れ
あるゞ忘れぬむ免乃木を忘を
ゝ介御神保れ乃しそのかみ忘のきま
にて後世きまふ歌ゟ
育れまや都乃をゝをみもせで

こゝろづくしのありぬべし月
あられ乃深き御詠をそのゝち安樂
寺へうけ玉はりしなりといふ

○

假名遣近道ニ曰大略こゑによむ字は
下をいとよむゝ端乃いをるべしくん
よむ字のゑは下をいとよむゝひは
字をるべしたとへばせい性さいオら

いもい禮拜たいをない胎内さいく細く
等なりはひ生とひ問わもひ思よもひ
齢ちかひ誓等なり中はゐゝ下のひぐ
き數あまるゝかよもずまぐひとさま
によむものゝゐれ字をるべしくれを
ゐくらゐたましゐまとゐ等なりゑは
はをとよむゝ其字のこゑもゐてよみ
まるゝほはをとよむをるべしたとへ

べきほ塩ろんさほ竿かんいほ庵あん
かほる薫らんいもほ巖がんりのほ焔
ろん等なりゑへれ字をふひへにかふふ
文字なるべしたとへばれもふれもひ
れもへいもふいもひいもへねゞふね
ゞひねゞへ等なり中共えまりろをか
なづたゝきやをたゝついて用ること
もあるとみえまりゑをんなのぬを

をしれをなるれとこのぬをれくりれ
なるべし物れ音といふをの字を皆も
しりをなり鐘れ音風り音等なり物り
緒といふをの字をいげれもをしのを
なるべし琴れを念珠のを袋りを等な
ま生類の尾りれ字をいげれもれく
のれなるべし馬のれをれれ魚りれ虫
れれ等なり御り字をれとよむものを

皆れくのれなるべしゝみむれ字をうと
よむもゝロをむをびてよむ字もむをう
とよむなるべしむゑむまむもれ木等
なりゝうれ字をトにうくものもトノ
ひゞれ數あるまよまざるハ皆うれ
字なるべしきとへべゝうゝ俗ほうし法
師きうたう堂塔れゝし料紙せうく
少く等なりゝふれ字をトにうくもの

もトノひゞれあまるよかゝふ字なる
べしたとへべれもゝいもゝみまなゝかゝ
きらふもゝれノふ等なゝふれ字をゆと
よむものもをしふるまゞふるをこふ
等なりいゞれもゆとよむ爲し也じて
こゝをかくまもうれ字なりよみをう
くにもふノ字なりいの字ひノ字も亦
ちうまれ大略なりいぬひほをれな

どをかなる書て字なるわろきもあれ
べたもひのみよかくこともあるべし
右あるにそろへてゝくべし是近道
なりといつり

○

慕京集ゑ曰細川勝元部臣短慮不成功
と昌黎のつくりし云ふなど消息れも
しに書つゞてはそろむえ状とひき

まひしゝゝゝば
いそゞつハぬれざらまゝを旅人れ
跡 ゆりそゝ野邸の村 ゑ

又曰康正元年れ冬藤澤乃役ゑいりゝ
てかゝれも味方もいりまゝゑ三日を
うさねていどみあらそふ事になりぬ
味方乃藤原重頼かゝれ首をとゝて
わゞ陣ゑ来てかゝくなんとかゝり

あるにいまゝで壯年まもきらぬ男此色
ちろ〳〵してたけきうるべきんちゑ
たり鬢のあるをたゞならずきたし〻え
てあたれもいやまし〻なゞながらに
くゝらぬかもうげなり重頼このんで
へれやさしき歌ひろめ物〳〵てを向ま
ときゝ免ゆりられゞその首にむうひて
かゝるとたさこそいのちろを〳〵からめ

うねてなるき身とかもひたらずい

巳上

案ずるまゝ歌を俗間ハ軍書等に文明
十八年七月十二日太田道灌鎗付られ
なゞら寂期のよゝ歌なるをといふを誤
なり群書一覽第四家集部まも沙汰あま

○

山州名跡志第八ま日京ノ北野ノ連歌

所ハ經藏ノ西ニアリ門東向毎月二十五日此所ニオ井テ法樂ノ連歌ヲ興行ス象詰ノ道俗列座ノ禮義ニカヽハラズシテ呼〻ニ句ヲツグ依テ笠著ノ連歌ト云ナリ

同第十一ヨ曰誹諧師貞德ガ墓紀伊ノ郡鳥羽ノ實相寺ニアリ石塔ノ銘ニ曰逍遊軒明心居士兼應二年十一月十二日傳ニ云卒スル年八十二歳ナリ其ノ辭世アリ　ツユノイノチキユルコロモノタヽクシゲフタヽビウケヌミノリナラナン　トイフ

○

都名所圖會第三ヨ曰貞德翁ハ童子たゝしとて妙蓮寺ヨリて連歌執行ひしに九條殿下尚實公ならせたまひくて

御発句

花に咲みちゆくゑ哉　殿下

春やかをるにひうれぬる袖　貞徳

春とぞふをゑ野乃きぞす鳴をて　玄旨

巳上

○

和泉名所圖會第一ゑ曰春爰州云さい
つの須うちれ帝乃御ゆゑゑ先皇ゑ御

代御連歌あるべきゑて発句ゑ肖柏法
師ヤべたゑ〜なるゑ〜ゑべ先うちく
に御覧ありたきゑ〜當代の作事なるを
〜ゑ発句にをたてゑ當座ゑヤべ〜歌
れんに同じ風情をもひめくら〜ゑ
るとて

あ〜引の山とをき月をゑをたて
月ゑ夢ゑるき末乃かけを〜

といふ歌をやのぎたちを御覽じての
ち肖柏をめして発句肖柏

そよをたてゝゑんをやいくよ秋ぢ月

御腋御製

庭にくとらぬ玉しきの露

案ずるに発句帳に禁裏御夢想ぢ事
ありて宮中の御會に系句しゝば勅に
てつかふまつる句九月十三夜とあり

て委しからず

同第二に曰逍遥院殿記云五月朔日光
鎮といふものの連歌興行をべたし頻
に申侍りしゝば光明院にて一度なる

濱松ぢ名にやうとゝほとゝぎす　肖柏

みどゝ夜惜きさゝら波の聲　實隆

きぐしさを光りに月を秋きちて　宗硯

已上

○

大和繪圖第五ノ曰久米寺寶塔真柱ノ銘

月九ツカシテ中岸ニ閑ー居タレヲカ一ツ

露五シヨレテニ迷躰ニ弘ー身ヒトリヒロミヲ一

法一ヒトリ不レ一ヒロマラ隨テレ一タクニ一ヒカリヲ一ス

道一ヒトリ不レ一ハビコラ時節一ヒトヲ一ツ

迷躰一ニ作ニ幽苔ニ弘一ニ作ニ孤ニといふ

○

東鑑第四ニ源頼朝荅ニ蒲冠者ニ狀ノ曰十一月十四日の御文正月六日ニ到来今日従巳脚力を立んとしいつる程ノ此脚力到来仍作をされたる旨委承ル畢筑紫ノ事などゝ申さるゝハざらんとこそ思ふ事ノていゝ物さいゝハざらんずして能く閑ノ沙汰ー待ふべし構てく國乃者

たにはくまれずしてれもすべし當時
を國の者乃ゝを破らぬ樣なることを吉
事まてあらんぞれ又八嶋まれもしま
すれをやけ并まニ位殿女房達など少
もあやまりなくさまなる事なくてむ
うへらをやさせたまふべしかくとだ
まも披露せらぞニ位殿などゝ大やけ
をぐしまいらせて先さままれもをる

事もあるらん大方ゝ帝王の御事今まで
もぢめぬ事なれども木曽ゝ山の宮鳥
羽の四ノ宮討まいらせて冥加つきて失
まを平家又三條高倉の宮を討をりて
うあうまうせんとをる事なをされば
能くも志たく免て敵をもらさずして閑
まを可レ被ニ沙汰一也内府ゝ極て憶病まれも
せる人なれば自害などゝまもせられ

じ生捕まとりて京へぐして上らるべ
しさて世の未まもいひ伝へてあらば
今をこし吉事なを返すく此大やけ
の御事哉未なき事なりいうもく
して事なきあうま沙汰せさせ給ふべ
し大勢たまも此世をよをく作舎ら
れゐべし穴賢くさてを構てく筑
紫れ者どもをにくまれぬあうまふ

るまわせ給ふべし敵よたくなをたる
と人のやさんま付て敵をあなづらせ
給ふ事なるべうらず侍ども乃事をま
まを彼にまりさしやさなどして人に
えうとまれ給ふべからず坂東まも其
後別事もなし少を騒き事ゐたず委き
此雑色ま作舎ゐぬ恐くと云云
案ずるまかく戦國れ世の中にて武勇

をふるたん事をんのまくなるはるさ
へ國中れものにはよくまれぬあうにと
れ教訓を誡はありがたき大將の明鑑
なることに目出度治世れとさはまれ
ゆふてきいよ〳〵國中のものにはく
まれぬあうれん拾第一の修行とをべ
しいたんや出家沙門れ身の上を柔和
すして慈悲をきとる境界なれべあ

さなゆふなにれ大將の教訓をんはか
まてわきるべうらず何事まもれれを
むきをもりて意得とを爲し

○

南畝莠言上は曰下学集ニ云江南所無ハ梅
一名也トエリ按ずるに須磨寺は若木れ櫻制
札とて紙は書しものあり其文は云須
磨寺ノ櫻此華江南ノ所無也一枝於ニ折盗之

輩者任天永紅葉之例伐枝者可剪一指壽永三年二月日とあるまわれは制札の文を疑ふ事久し江南所無い梅の名なるを櫻とせしまいうと思ひしが文化元年七月れころ西遊して此寺に入てまろあるまは書をえしに須磨寺の櫻とかける櫻れ字紙のやぶれありてさぞうにみえわうず源氏須磨巻ま

墓れれさくらされを免てといつるに附會して光源氏を源九郎とあやまれるまや櫻に江南所無の名ある事いまだ学も及べず戯まる梅一もと植て此華蓁山府君なまともいたまほしと利口せしが此寺れ門内ま若木乃櫻と標して欄をもてかこひ一むら竹のもげれるを源氏やしまと称し櫻壽院とい

つる坊もあれば古にいはゆる成事不
説の類なるべしとロをとぢてやまぬ
そもそも園西惟中が續無名抄をえれ
ば此事を論じてまづ梅は制札を櫻乃
名木あれば取合て須磨寺の什物とし
たるなるべしといつまといつり
和漢文操第四曰花制札　源義經
此花江南所務也一枝於折盗之輩者任

天永紅葉之例伐一枝者可剪一指者也
　壽永三年二月日　評云此制札を世く
に書つゝて或は須磨寺は若木櫻を
まと兵庫名所記は出せしが其記はい
江南所無也とありて所無の字義通じ
がゝし或は弘安禮節は難波之別當
源判官殿へ花制札下信は雲辨慶彼作
付はそれ　江南梅花折一枝者可處厳

科者也とお德いへば義經御覽ありて
花を折者心なくて花を不折あまり強き
文言とて則御直しのよし　江南梅花
折一枝可切一指者也云云今思へば乱
世に紛れる難波の制札を須磨寺にお
借しや梅に江南れ仮あればいづれる
後勘あるべき也或る天永紅葉之例も
其代よりの制の沙汰ありや尚又後勘あ
るべき也といつり
甲陽軍鑑第四ヨ曰関東上杉管領はな
の制札ヨリさくらを一枝も折りと
まいりてあるを八間流罪死罪に作付
らるべきものなりよりてゆ件と書て
られたるなを掛又信玄公甲府穴山小
路真立寺とやを法花でらヨ紅梅ヨ甲
斐一國のことをやをに及ぐず近國ヨ

もさのみたれてくなりさるにつたたれ
真立寺なる花乃制札をヤ信ようつき則
禁制の札ゑい花一枝一葉きりといふ
ともたれをとる輩これなるにたねて
いぎんかうう屋ゑれ例ゑまかせヤ
付べきものなりめ件とあそでもも子
細を花といふものをきゞゑのつねれ
せいたうらうぜきにちゞひ花乃主こ

れをたしむをまさこん春れ者免れと
るをえぬものゝたゑりゞれもやさし
れ情なるに流ざい死ざいをあまるを
るとれ義ゑていゆとさいつり
又莠言下ゑ曰北村季吟翁れ墓ハ池の
端茅町正慶寺ゑあり昔年ゆきてえし
事なを其墓に
花もうれほとゝだををもまちいでつ

これを後乃を打ものふことなるを
再昌院法印季吟先生　宝永二乙酉年
六月十五日八十二歳卒とほをつけを
をといつり
又文操第四ゑ曰遺庄五郎書　楠正成
此度集人義下事非別義我等寂期近ゆを
覚ゆ頑貴殿成長之器量又屈度ゆ招た
義之所重文雖道ゆ弥勤学無懈怠成長

之後我等ゑ中ゑ被察ゆ俳言　尚〻ゆけ
を後ゑ公ゑり相ゑを見ゆ組より見ふ
るゆ弥をかゝみと賜之ゆといつり

○

南都佛足石ゆ碑ゑ和歌ゆ一首あり其
中の第二首に曰弥蘓知阿麻利布多都
乃加多知夜蘓久佐等曾太礼留比止乃
布美志阿止〻巳呂麻礼尓毋阿留可毛

といつり正面ぞ墨付のところ竪五尺餘横一尺五寸余なり拾遺集第二十に曰光明皇后山階寺なる佛跡よかきつけたまひる　みそぢあまりふたりの姿そなへまるむらしれひとろふめるあとぞこれ　といつり

遠州牛皇れ巖崛れ和歌よ曰

ををうーろとな見車に法のみちひれてこよ廻りきよろり　といつり弘法大師御真蹟とや傳めるなる正面ぞり墨付れところ竪四尺五寸余横一尺四寸余なり

上州多胡郡れ碑よ曰

弁官符上野國片岡郡緑野郡甘。良郡并三郡内三百戸郡成給羊。成多胡郡和銅四年三月九日甲寅。宣左中弁正五位下

多治比真人。太政官二品穂積親王左太
臣正二。位石上尊右太臣正二位藤原尊。
といつり六行八十字正面ぞろ墨付乃
ところ竪四尺一寸余横一尺八寸余之
和州粟原寺ゝ塔乃露盤の記文ゝ曰
寺壹院四至　限東竹原谷東岑限南大岑
限樫村谷西岑限北忍坂川
此粟原寺者仲臣朝臣大嶋惶惶誓願。奉
爲大倭國淨美原宮治天下天皇時。日並
御宇東宮敬造伽檻之尓故比賣。朝臣額
田以甲午年始至於和銅八年合廿二年
中敬造伽檻而作金堂仍造。釋迦丈六尊像
和銅八年四月敬以進上於三重寶塔。七
科鑪盤矣
仰願藉此功德
皇太子神靈速證無上菩提果

願七世先靈共登彼岸
願大嶋大夫必得佛果
願及含識俱成正覺

といつり正面ざるに墨付れところ竪一尺六寸余横一尺九寸余なり

奥州宮城郡九壷の碑又曰

多賀城　去京一千五百里
去蝦夷國界一百廿里
去常陸國界四百十二里
去下野國界二百七十四里
去靺鞨國界三千里

此城神龜元年歳次甲子按察使兼鎮守將軍。従四位上勲四等大野朝臣東人之所置也天平。宝字六年歳次壬寅參議東海東山節度使。従四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原。惠美朝臣朝獦修造

也。天平寶字六年十二月一日
といつり正面ぞるを墨付けところ竪四
尺五寸余横二尺六寸余なり
右五種ゝ予ゞ所拾ぜるところれ拾物
なるを命終のちそのゞこにゝ散在せん
依て今爰ゝらんしをくものなり群書
一覽第二擁書漫筆第一等を之合せて
そのかもむきをゝるゞ

○黨援之衆無競大義
群迷之中無辨正論
晉宋齊梁唐代間
高僧求法離長安
太人成百歸無十
後者安知前者難
路遠碧天唯冷結

砂河遮日力疲弾
後賢如未諳斯旨
往往將經容易看
何乃萬里來可非衒其才
增学助玄機土人如子稀

可曾婦禮婆等麻良奴毛乃乎登之等伊
非豆故登思波伊多久於比曾之尒家流
遠之豆流也奈尒波乃美都尒夜久之

保乃可良久毋和禮波於比尒家流可奈
於比良久乃許牟等之理世婆可登佐
之豆奈之等故多敝豆安波左良麻志乎
佐可左末尒杼之毛由可奈牟登里毋
安倍受須久留與波悲也登毋尒可敝流
杼　等里杼無流毛乃尒之安良禰婆等
之都伎乎安波禮安奈宇杼須具志都留
可奈　等等米安敝受無倍毛等之登波

伊波禮家里志可毛都禮奈久須具留與
波悲可　加賀美夜麻伊佐多知與利弖
美天由可牟等之敝奴流美波於比也之
奴流杼

後徳大寺左大臣

時雨ぬる名をもあくるか那
引ちる月乃いるに任せて

従三位頼政

前右近大將頼朝

我ひとりふれ軍ゑ名取川
君もろともにうちわたさせん

平景時

源義家朝臣

衣乃きてゝほころひゑあり
年を経しいとゞ乱乃くるしさに

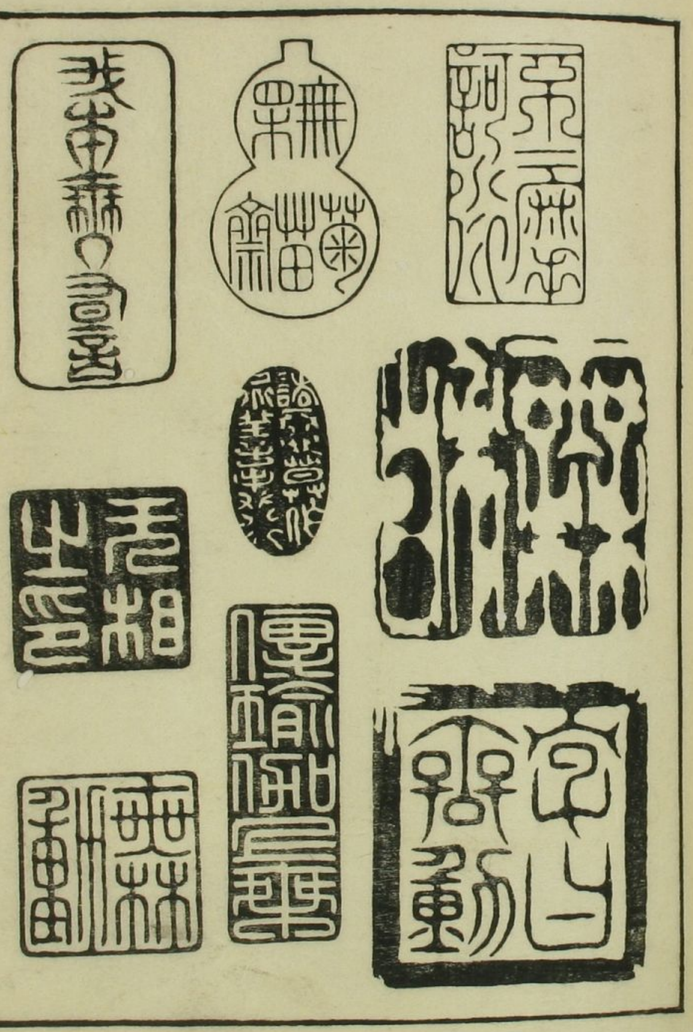
安倍貞任

巳上

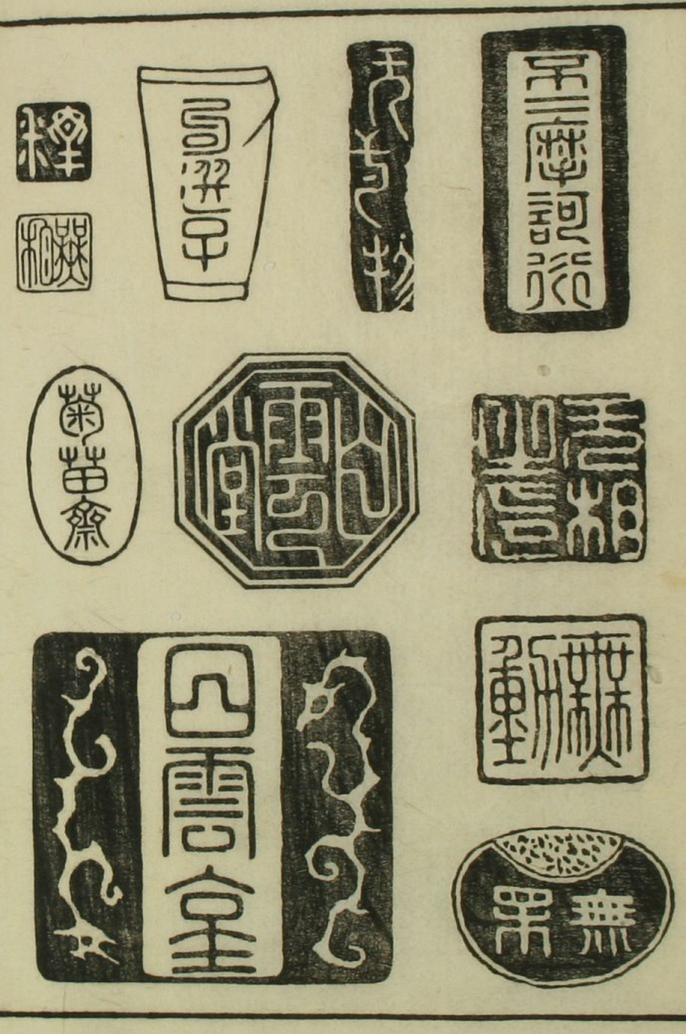
此五歳を能書五人をえらひてかゝ
せ唐紙一葉の石摺よせぢやとおもふ
なり第一歳を西域記に載るところ
は如意論師乃遺誡のことばなり第二
歳を西域傳よりあるところは義淨三藏
乃開經は頌なり第三歳を性靈集の序
にのせるところは馬捻ゞ離合乃詩

なり第四歳を隱逸傳よりのせるとこ
ろは七叟乃和歌なり第五歳を菟玖波
集に載るところは雜連歌なり第四
第五を能筆を求めゝ〜ゝぢも其餘をい
まゞをとめえず予も老まを鐫石成就
〜ろもとなふれたゞえられべまゞ爰
よ寫置ものなり
又予ゞ所拾せるところは石序を古わ

まるの石まて今ハるを無類乃もの四つ
五つあり彫刻も名人の作もなるを示さ
かゞにいなるき物もあり肉壷もめゞら
したものなる銅乃もこれあり象牙水
晶角乃木乃等もあるを乾等乃物玉ハ緒
乃たえまのちをいゞれの人ハ手に
ハちなんこともをらずふれてみなあ
つゑて爰まうゝしをくものなり



茶談子
百談子
白雲堂


無果

○雑談集下巻ニ曰或師の云利休ハ茶乃湯ニあひて事を好むともがらその折ふしハ道具どもを色ゝ古し色ゝ新しなど〳〵目をたりてほめあひまれバ利休散〳〵不興ニて新古乃目利(キ)ゝあさ人にこそなれ道を好むともがらいまとへ欠(カケ)摺鉢なりともはなはだよろしく茶乃湯ニ用ゆるとも用ひられざるとのさゝひを辨(ワキ)まへて物數寄をほむ色たなるとなりしとゝや誹諧もさのごとし句ゝ道具なるゝ點ゝあさ人なり誹諧過ての點なれバ其席にすゞはるて色ゝ長色ゝ九珍重なるべきいな意(ゑ)まゞくやゝ打越乃六ゝしゝ所ゝ席れゝぶりたる時ニ宜し

く付流しをらべたとへ無點の句なるも色用なり點者ろんをうねて句ごとにあらぬエミを色ぐらし人れ前句をばひあひなどせんを無下に口惜きちらたなり用無用の境新古乃分別んざしを高く守らば自然の風流あらもれて幽玄乃一句もいうで思ひちがしぬべきやされば茶巾折目乃まく

れ茶巾なれば作を用ひざるもはのよろしたよやなら葉

落氷折目のまくれ茶巾哉　普船

ことさら今朝も耳そつ色ぐさた　其角

巳上

案ずるに色笑れたるもむきを連歌の席にても常に意得あるべき事なり

又俳諧十論衆議に曰附錄に漢書賛聞

張良カ之智勇ヲ以爲ニ貌魁梧倚偉ナリト反テ若シ婦人
女子ノトありしれ仁勇を内よりてみて
張良ゞ爲るとゆとの遠なりむゝ山
崎宗鑑を攝政公笑ひたまひて
宗鑑ゞ姿を爲れべがきゆ
と宜しもなるとゆとれ遠なる芭蕉翁
乃摂州山崎なる其宗鑑の廟に詣て
あるがゞされ姿たゞまん杜若

となりしいそのがきゆゞれあるゆゞ
きゆ姿なるべしとゆり
案ずるよかきち姿を爲て人を笑ふ爲
ゝらざる事ゆ殘編の中に載るとこ
ろれ今物語よりふゞごとし赤黒牛安
勝馬頰道風猿面太閤等れごときをの
く外相と内心と雲泥乃遠ひまして
その美名末代まで殘れを鬼ゆも角に

も人をあなどることなかるべし

○

貝原篤信ゞ云老人の保養ゝ常ゝ元氣をたしゝみてへらをべゝらず氣息を靜すしてあらくをべからず言語をゆるやゝにしてはやくをべゝらず起居行歩をもちゞゝにをべしをの中れ人乃ありさまわゞこゝろよかなはずとも

凡人なれゞさこそあら免と思ひて人乃過悪をなゞ免ゆるしてとゞむべからずゝわゞ身不幸ゝして福うもく人われに對しして横逆なるも浮世れならひかくこそあら免とおもひ天命をやをんじてうきふべらず常に樂しみて日を送るべしし人をうらゝいうゝ身をうれひなゞきてんをうるし免樂し

まずしてはうなく年月ををだなん事
れしむ歟〜と云云
案ずるに芭蕉も俳諧を老後の樂しみ
といつり愚老も連歌を老後れ樂しを
とせる人情いまちくなるものにて
樂しみもさまぐなり一様にもたれふ
歟らず昔年先達れものがるるに
連歌師とれんゞせぬもの寄合て

といふるに童子付て
かみれるもありもろるもなし
巳上

○

利運談第四に曰堪忍之利運とハ貴賤
一同堪忍の二字を第一に身にもたざ
れば一生利運開運を遂ることあるた
ず既に楠正成千劔破に籠城せし時堪

忍を城郭となし油断を大敵とと書
して士卒を誡(イマシ)めるとぞされば古へ
より此二字を守りて天下をたさ免子
孫繁榮ならざるいなし貴人も勿論卑
賤れものといへども人みなそれく
乃をこなくんばあるべからず其こ
ろざしを成就せんとするまたとへ
現然まる恥辱非義非道を先より仕向(シムケ)

らるゝともそれをよき程よあひしら
いならぬ所までも堪忍をして無難よ
ことをもとし負(マケ)てやるがる要の利運
なりいとゆる無理が通(トホ)らば道理かな
られにて取あわぬがしその外小事
を顧(カヘリミ)ず弱夕此二字をよく守りその功
がつもれば自然と立身出世もはやく
わが身乃利運となるべし無理よこら

ゆるとゝ思はず気がつと発修行とゝもへゝ後〳〵ゝ常にするぞうゝ古句に

氣にいらぬ風もあらふる柳ゝ郎

此句れ〳〵ろ堪忍よく叶へゝ草木あらぬ風にさらへゝ必ず枝葉を吹おるゝなり〳〵ろを柳のごとく柔和にもちて兎も角も氣をながくゝて時節をまゝねゝ大利運を得ることかゝ

ゝ堪忍れ二字をよく慎〳〵守りゝ人ゝ異國にてゝ韓信なり本朝にてゝ頼朝なりといつり

○

閑田耕筆第二ゝ曰尚齒會れ名高きゝ樂天の會本朝にて清輔朝臣乃會なりゝれども其壽數ゝれきてゝゝるゝゝとゝるゝきらずめ〳〵らゝれゝ正德五年

江戸乃人生嶋幽軒八旬に賀に招きし
人〻の齢なり志賀瑞翁を百八十七歳
小森閑齋を百三十六歳古結宗軒を百
八歳石寺權左衛門を九十七歳下條七
兵衛を九十二歳茶人一雲を九十一歳
岡本半兵衛を八十三歳以上七老なり
百歳已下といへども精神實ならでハ
會はれもむきがるさたをさだ免て矍鑠(クワクシヤク)

の老人なるべし右乃うち志賀瑞翁を
人よく賞ぜられ打のれ卅二三ハ時ハ
翁乃三十三回ハあるれをとて向の
歌を勧進をる人ゆをきといつり
案ぜるハ予が考るところハ人に今存
命ハて長壽なるを東海道ほどゞやれ
郷のわゝりハ祐尊上人とてこと百
二十三になるを加持門の老僧あり

去年中手蹟を所望しまれいらく
なうくにふむ云のふいなかりあを
冨士乃ちらゆきふしれ志ら雪
右御製なりとかきてたくられきを色
も今時まを免づらした長壽なり
又閑田次筆第四ま曰京三條縄手れ伊
勢屋といふ元結を商ふものゝ家乃造
作せしまを病者れたく出来しらべト

者をたのゝて筮させしにられい逆木
柱れ祟なりとといふ時まなる人吾祝ふ
色しとて
伊勢屋といい元ゆい一の家なれど
さか木はしらもなにらくるしき
といつるしに不思議まられりてと
なく成しとぞ商賣の元結に榊までを
取あてせしい面白しまなげまにてき

つねまりてうつををとり喰ひろれば
杉のゞ名れ作りを喰ふ狐ゝ那
といふ発句を書て畠ゑ立ーゝば其夜
よるをとらざりーとぞといつり
案ぎるゑ狐ゞ出てなをび狐喰ふ時に
これ茄子をつねゞ喰ふと貂ゞ註進
を書て其畠ゑ立れば狐らずといふ
俗談と同じーとなり

○

寛政れをろ方寒痂をわゞらひーこ
ろ大和のこーといふ所ゑ服部宗賢と
て名醫なり療治をたのみにまかをる侍
をて彼地ゑ逗留乃時そのわををれ山
乃うへに益田れ池の碑乃臺石ありと
ゆて友どち四五人さそひなり免案内
者ををとひて其山へのゞをてろれば

誠ゝ目をおどろかを程乃大石なりれ
ほゝそ縦ゝ二丈五六尺ばかり横ゝ一
丈四五尺ばかりにして山の片さがゝ
なる所ゝあり前れ方ハ地より五六尺
ばかりも出ゝり後乃方ハ地ゝより出ゝ
るところ二丈ばかりもあるらんゝ
一つ石ゝてうへ乃平れところゝ三
尺ばかりの方穴二つゝ深さゝ五水

ゝまりて底みえず左右乃端ゝなく先
に溝ありてふかさ一尺ばかりもなり
なん臺石なれバゝや何方にも文字ゝ
みえずうゝろれかゝい一面ゝ苺むし
て希代乃ものなり臺石をもりてゝふ
に其上ゝ立ゝる石碑ゞ今れゝにある
ならバ日本第一乃いしぶみならまし
ものを烏雫惜哉そのかゝさらに草刈

わらい二三人みえるゆへ戯まこれ
を何といふ石なるぞやと問ひられば
られなん船石とやをなりと答へまを
石乃うち船よ似られたなる歟一其
石の上に四五人あ居してかれいひな
どくひ酒ものゝて後よ帰るさになん
でなどちれ中よりまをだのいけてふ
六文字を五七五の沓冠よをきて時乃

発句せよといひられべうく
真字(ナ)みえずまでいく秋れ石乃こけ
とつかふまつりまを好古の人を為ね
てえるべーまよ面白き所なり若し為ん
にを益田乃池れ碑の臺石などゝ問ふ
ていられるーまで船石のある山を
いづこと為ねらればいうなる樵夫わ
らん歟もよくをるまてをゝゆるなり奥

州つゞのいしぶみを見んと壺碑を
ゞ見ねてそのわたる乃山賤市女
等をもちざるなり者ゞたていしれば
るところもいゞこそやと問ひられば
よくあるをて答めるゞごとし
又さいゝころ大唐青龍寺慧果和尚れ
碑を初開講よせしとを聽聞の中よを
ある人云弘法大師乃御名を末代まで

和漢に高し新唐書よもこれなりや予
云られあを東夷傳にみえをり舊唐書
よを佛迹ゆまを載をれども新唐書に
いみなをゞを をてゝのせず其書れ中
よけづりをてられずして載をかれた
る事を誠よわゞ大師れ美名なり新舊
二唐書にのせてあれば未世まで本朝
乃面目なりあふいでをふとゞをし云

かるを年譜和讃よりたゞ舊唐書のこゝ出
せしゝいまゞ詳らならず大師は御名
を末代まで高しといふこゝろ成
いく春を経るとも御名ハ高野山

巳上

○

享和二年れころ初瀬山乃文殊院よを
みはりしは五ふつぎあり免まるゝもの
木を求めてそれを題よして五木をよ
ゝ入し発句を案じて二句
古枝さくはなのみぎりをハ埴もなし
まゞさくいゝだりれゝ乃ひと木哉
とつかふまつるゝれゝある人のいた
くむゝし筑前は福岡よて六艸六香を
よみ入し発句を承りしゝども其時か
きとゞ免ざれゝ今をわをれてをゝし

甲斐もなく兎も角にと筆まよかれつゝをうざれば老後の樂しみにもならずと云云乞まゝにて又六首六句をよみ入れ発句を案じてゝく

岨づたひたどくとふやはなれ宿
むさぼれしきちねいとをし湖ろうみ

巳上

○

文化庚午れ春卅六年をこなれし本山を出て名ゞなくあゞまの延命寺へ移轉せしまゝひろれむさしの月をえでやと思ひなして月く朝日よ晩日まで十とせゆまりろ程こゝろにゝ夢て久堅れそのたれわるゝて雲雾れなきぬるをこきらずして徳るに浦和を西の方い三國一ろ冨士山をゝぎゝをに

みえわたりて月ゞしらの月をゝるゝ
よろゝ文政戊寅の冬東都乃金剛宝阜
へ轉住してそのところれ風景をゝる
に油嶋をひんゞしの方へあまさがる
ひなをゝだてにみえわたりて月ぞゝ
の月をゝるによろゝをゝいなれども
朔日れ夕月と晦日乃暁の月とをみえ
ゝことなゝ二日とれ九日とれ月をな

が光ゝ発ゝ八月二日れ夕月をゝて
むさゝ野をゝ二日も月乃ひゝり哉
九月廿九日つごもりにして暁ゝ月れ
みえゝれゞ
むさゝ野ゝ出ゝる月れかぞゝをゝ郎
又大の月れ廿九日をゝ予ゞ誕生日なれ
ゞ暁起して鎮守稲荷大明神をまゝり
院内をのこらず院外乃童子等もあま

た呼ばれ出て餅さゝなんどのいとひ
事もとしくれ例なるは今年もとゝ
わけ前夜より天氣よろしく雲も隈な
くもれてちゝはゝれ雲雾もなく寅
四ツ時もうちをだて卯一つどきにも
なるらんゝしと思ふころひんゞしく
方より出る月の形ろまんまるにみえて
もしれ光りのいと清らゝは細きをが

たい三日月に似きりなる西風もそゝよ
くと艸木ろうへはわるうてその氣
色いふぜうなくしてぎに面ろふ
れぞえられバとうもあえずゝく
みゝがきの姿もかくや今朝は月
又晦日と朔日とゝる月のみえざるゝを
つごもりとはつい書ツ月ろ新もなし
又文月晦日ゝ自然齋の正忌なりゝる

に今年ハ廿九日つごもりなれど暁よ
れきてひんがしれ方をみれバあまさ
がるひなの地をはなれて出る月れ
みやこのたゝ乃ところかをうにひか
るあらはれてその光りいさだよく清
りれバんもをみわるをなにと船をれ
もろくれたゞえ侍りてかく
みそうなる月の光りれあをもなゝ

とつかふまれてなゞ光るうちに
ひなとゝら光ゝいさだよくあざやう
なる月のひりもも少ゝをうをくなる
て二日れゆふ月のごとくなれどもひ
かるの上下遠ふなり程船く朝日れ出
りれバ亦そのうををひりもみえが
たくなるにあり

巳上

○

辛巳は秋南呂の中ごろ壕懲撿校より
寛永年中乃連歌三百韻は懐紙をはく
られまるを予が連歌を好んで敎ぶゆへ
なるべしそのころざしろ深切なる
ことを感じてをのく一順づを爰
に寫置ものなり
寛永九年三月廿九日

於高松様　何船

散跡も古まぬ花乃春哉　昌俱
名殘閑まを紀春函は庭水
露乃色も寒む笆に蝶乃ねて　嗣良
そのふは光澍著ぬめり　玄的
呉竹の戦涼を風は書　昌程
河舟さして行岸傳ひ　春重
月影もうゝへハ浪のちらむ夜に　元知

霜冷しく千鳥啼こゑ　久園
殘らすもうら枯渡る淺茅原　寅滋
さそ野はつくく乃香なり　仙閑
狩人やまさ書ぬよりなるらし　可休
雪夢に消てあらし吹山　桃筆

巳上

寛永十四年卯月十五日

於　二條攝政様　山何

せはさうぬ初書をたな夢時雨　藤
花きちなる乃香に白ふ庭　昌俱
狗簾捲ハうふ新風袖振て　昌通
つもりし新れ雪乃ゆきさ　玄陣
積ひく松乃山や近うらん　玄的
夏行夜も乃旅ねいさとに　雅陣
舟とめし湊れ月の新浦て　實任
浦われ屠乃孝さたうく　和仲

夢拂夕汐風乃吹をさひ　養山
時雨〳〵露の白き松の葉　兼也
木〻乃色よ落さ光れるらし　俊臣
今朝を閑さ遠乃やまく　道芳
雲い皆消つくしたる空晴て　頼房
分行方やむさ〳〵の原　執筆

巳上

寛永九年卯月十七日　唐何

摘い世よ一木なる白ひゝ郎　昌俱
宿をつゝれすゝふ郭　乙　吉親
夏衣ほさん日毎よ面落て　玄的
白雲まゝふ山乃香ゝさ　青海
待の夢ひくたくる夜も明殘て　吉親
め覚て寄さ野へのゝ所　昌俱
露い霜と月にや待ひゝへぬらん　青海
草陰つゝ細さ虫の声　玄的

巳上

又同年ハ冬霜月ハ二日乃夜の戌ハ刻
ぢうりうを油嶋妻乞稲荷の遠より出
火ハ南風はゞしく吹て天滿宮社頭ハ
立木ならびに根生器院東南乃椎ハら
うハ常盤木まで ことゞく類焼し
て枝葉のこるなくきりたろし眼まかく
る物ちりばりをもなゝたりふしたを

をれハ九日乃曉の横雲たなびきしひん
ぎしの乃をまかをゝなる月ハひかりをの
いとたらゝにみえられバ二日
横雲ハなみまに月乃こりゝ那
あゝつたのひかりもさむし東方
又あるところハはしらかけものゝ
心　小　則　百　物　皆　病
とりを主人ようこれゝ和句を所をせ

られるゆへにいなひゞくて
天地乃中ゑ生るゝ身をもちて
かゞやうにつゝふまれてをれどいきぢう
よろこゞれてかちんを出ぜり
又水無月れついたちゑ日そくなれば
日れ新のかゝれどもけぬ氷室ゝ飯
とつかふまれゑきれば有る人乃云こ
とゝゝ六月ゑ日そくあり十二月に月

そくゆゑ世の中れゆさゝならんこと
見来たゝといつり予ゞ云ふかる屋ゝ
らず蝕ゑ変異の蝕あり常度れ蝕ゑ
ゑ常度乃蝕ゑ不祥なるものゑハあら
ゞ暦象編主委しく論ぜるゞごとし
又むゝ三月廿一日に高野山へ糸偕
してそれより龍神の温泉ゑ行もむき
しとゝ同宿れ老人三宝多なりとて郭

公乃屋うなる名をもみ丘にゝきしを
出して発句試所をせしゆへ繪きた
れゞ筆なりやと問ひられべ時代きゝ
うとゝらざれども往古高野山より三
宝名を見せし大徳尊者木食上人乃
筆なりと申伝めるなると答ふ予へ三
宝名といふとゝきゝ形を見しことも書
を写しこともなきれども老人ゞ申を

にまかせて
みゝの名を一書よふこゝろ
とつかふまゝてあゝへられべ老人
よろこだれゝるゞ翌日になりて蜜酒
といふものをたくられきり龍神わゝ
ゝい家くに蜜蜂を飼ふてをく所なり
亦疱瘡ゝ聖武天皇れ御宇よりわゝりて
千年あまりになれどもそれさへいま

だ流行せざる程乃遠鄙れ山中なり亦
三宝といふも佛法僧なり平康頼が三
宝ハ諸宝の最上なりとて宝物集といふ
書を著しまるを初んれ人乃た免まるを
ろしを集なり
又過よし比慶安太平記をえるに正雪
が武者修行の時ひとといふをざもの
をうちと免まりとある文処よて

日ゝに名れやまれも高し秋のを
とつゝふまりまてそのゝち備中乃辰
が東遊雜記をえれバ蝦夷れ地ゑ羆と
いふ獸あり四足ゑ猿乃ごとし其かゝ
ち大なるハ一丈あまり小なるゑ八九
尺ばかりにて人馬を喰ふ馬をと
るゑ馬乃首尾をあれ手に搏んて背
にうちかゝ立て走ることと人の走るゑ

まもはをし實はれそろしき獣なりえ
うあれども蝦夷乃猟師もその獣を毒
箭をもつて射て免皮をとり其肉をく
らふ毒箭その獣はあるれば一足も走
ることなく即時に倒れてくるひ死
を的當乃妙毒なり猟師れ外まも毒方
の調合をもるものなし蝦夷にていひ
ぐまとよぶ松前はてもれぐまとやを

なるとと云云案ずるは正雪がうちと免
しものも蝦夷れひぐまなるべし名も
所はふるとて遠ふものなり
又そのうち麥秋れをもつかと上毛州
箕輪乃古城石上寺はれねて俳諧師う
ち集ひて月並の會なるもころをれ
れも夏乃月れ題にて発句ひとつせ
よとあながちにもく免られる時れ

ふし庫裏の庭前よりて人乃赤躾になり
て馬城のらひあるを見て
むま洗ふ人の躾やなれ乃月
とまられば俳諧れ宗匠苔廬といふも
の一段とほ免られ者り予ガ杖もへら
く発句れ秀逸なるまならざるを
俳諧乃仲間へ誘引せんた免の方便説
ならんと察してそのちい會席ごと

にも免られしゥども一句をせざる
なり初ん乃人もよろ乃ゲるは意得なる
爲を事なり
又ものの中ごろ木曾れあぎまれは
ていをおう雪ふるゆへ其日もこ
乃所はとまりられば同行の中れ誹諧
師云木曾の桟(カケハシ)はも芭蕉翁れ発句に
かけたしや傘をゥらむ菊かげら

といふ秀逸ありて名高き所なり連歌
乃発句一つ所をとなれべとてあえず
かすはしを渡りうねまる深雪う郎
とつうふまれまきれべ誹諧師云われ
らも連歌をべせざれどもむうしも連
俳歌仙行といふものあれべ今もその
ふまて腹れるをつうまれらんとて
木曽川たろし寒たるごを

とを志まをろり見まで日くにつうふま
つまし発句もなれども愛まる載ずまぐ
此二句のを試出しをくものなり
又疇昔山中の隠者より五色れ朝顔な
まとていまぐ蒼も出ざるをたくられ
まり近年あさがほまいかをくのい
ろをなわうれてたやよそ七十種だう
まもありなんとやを人なれべ五色れ

槿も其中にもあるべし青赤白乃三色
ハえづらしからず黒黄二色も見迫又
ざる蕣なれば色しなひたて花をみ
でやと欲して石臺ようへをたてかく
くろまきにさく紅貝乃花もゞ事

巳上

又雑茅短口れ云の歌も無益乃ことな
がら少く書載るものなり予昔年志ふ

されこがねゞてら乃野飼の駒れこま
どもを見物ま系りしはあゞまばしを
わたらずしてたしろそゞにまこわた
しれふねなるゆへふねまのまて渡守
にむゝひてはわたしもあまりま橋を
ちかくしてあるハ由緒まてもなる事
やと問ひしゝゞ渡守ゞ答ていもくゝ
所ま古歌ありて人みな

ちれるところなり其歌に云

あげまぜしわゞつまはしとかくらゝ
わゝしいたまへろそばをたなれぬ

といつりわゝしいをわゝちやとヤせ
しなるむゝしれみやこ名のわもかゞ
もゝひやられていとわもゝろしわ節
そら拭かるゞねれかぞくうちつれ
てわゝりゝれゞ紅中にて

橋とふねたなれぬ中やわゝる屠
ヒロをさびよヤきれバ波守もゝろ
えなるものにや再吟して矢立を出し
書留免らるゝなり

又壬午水無月五日江戸日本橋かゞゝ
たるてわゝりぞ免に奥州一ノ戸村ゟ五
夫婦そろふて長壽なるものなる山崎
清左衛門といふ代夫婦れ年男百四十

五歳女さと百三十五歳其忰清藏夫婦の年男百十二歳女さた百九歳其孫清之進夫婦乃年男九十三歳女ふさ八十九歳其曾孫清之助夫婦乃年男七十三歳女はな六十八歳其玄孫清右衛門夫婦の年男四十三歳女さん三十九歳なるかくれごとを乃五夫婦のうちゑど免れ二夫婦糸府してわるるぞ免あり

一宮板行まりてよみうるまゝ求めやいとて眷屬ども物借るせしなるなるまりに孫袁車と笑えて筆をとるそのおもむき伐寡ま書為免をくものなり虚ゥ實ゥ更ま弱ぬ色しゝ赤むゥしある人の云

遠い所ゥにてちかい事ゥ哪

さいふるま

ぎさはいてからくわをする日や橋

みなる人乃云

れ〜や三八よ質を流れる

〃　といふ白に

かを川よ九把をく苗ゲ二把みえぬ

みある人れ云

ぜよかねをうるのをなれべうるもよ〜

爰乃よなれをみねるもよ〜

かへ〜

ぜにうねいうをれをなれどが〜もせず

ゆ発乃よなれどさふもねられず

みなる人の云

をれ中乃なさけもらずれ義理もらず

はぢもきらねば金をちとする

うへ〜

をれ中を義理もなさけもかね次第

金がなまれバもぢをかくなり

案ずるに四首の歌前の二首と後の二首とを作意のれうしみも姿情のもむきと碁にてやせバ二目も三目もちがふなるべしホれしにゝも三八五九質をセにとるをなして苗れ流れる事を仕立きりぬを畢ぬなるをくゝ質の縁語なれバ面ゝろき付様なり

又ある人の云六歳れ童女つゆゞ辞世

まてゝ志でしなきよのなかれいとまごい

むとせのゆめのなごりれしさに

つゆほどのはなのさかりやちござくら

巳上

○

群書一覧第六雑書部に曰或書ニ云櫻井基佐い洛陽れ人剃髪して永仙と号

を連歌をよくせり宗祇宗長同時乃人
なるを宗祇新菟玖波集を撰ぜられるる
る基佐れ句ゝ入られずられを憤るて
中あしくなりて宗祇乃句を嘲哢をる
事ありまを落書して云
遥見筑波銭便入不論上手与下手
あしなくてのぞりかねまるつくば山
和歌乃道まハ達者なれども

巳上

○

沙石集第五ま曰学匠れ萬事を論議ま
心得まること三井寺に教月房とて碩
学なるを幼少の時より万事をまず
へず学問乃外他事なくして論談決擇
れ道ゆるまれまりるゞ和歌の道つ
やくもらざるまり弟子ども中るる

いわゞ朝れならひ古も今も歌ふ和歌
乃道御心得なきこそ無下に覚えゐへ
といふさて和歌の弁きいゝなるもの
ぞと問へゞ古今れ歌をかゝる
年のうちは去いきよろり一とせを
こそとやいちんことゝやいちん
といへゞ両様は問きるを御房とちれ
たるとはれきりとぞいひそるよろゞ

論議はきこえきるにこそといふり

○

七嶋日記は曰八丈嶋れ人き飯をくふ
ことなゝ鹹(アミタ)草といふものありて四季
れ不断草なり凡十人乃食は麥三四合
を煮きゞらゝして其中へ所ゝた草を
さはよたざみ入うを汁を汁んてきく
を雑水といふ嶋人乃常れ食物なり爲

朝明神のよをたまふとゝゝ歌ゝ

我なくも行末まもれあしたくさ
いもをる人乃ならんかきゝへ

といつゝ案ぞるゝむゝ源顕基卿の
罪なふして配所ゝ月をゝゝと恒に
ねゞをれゝ事もいとゞうかなしく覚
えゝゝゝゆゝそのゝゝろをゝくなん
つみなくて嶋ゝ月ゝゝる夜まもゞ郎

巳上

○

續群書類從目録ゝ連歌部ゝ曰　竹林
抄　紫野千句　文安千句　宝徳千句
河越千句　熊野千句　伊豫千句
石山千句　出陣千句　至徳二年石
山百韻　宝徳三年三代集作者百韻
同年伊呂波百韻　寛正五年將軍家百

韻　長亨二年水無瀨三吟百韻　明應
三年新撰菟玖波祈念百韻　同五年本
式連歌百韻　大永元年伊勢物語詞百
韻　天文廿二年尼子晴久夢想開百韻
弘治二年永原筑前守重與奥行百韻
永祿五年飯盛城百韻　元亀三年林
中務少輔奥行百韻　天正二年水野監
物守隆奥行百韻　同三年蜂屋兵庫助

賴隆奥行百韻　同四年甲斐左京入道
宗柳奥行百韻　同七年定家卿色紙開
百韻　同十年明智光秀張行百韻　一
條殿御會源氏國名百韻　應永元年後
小松院御獨吟和漢聯句　應仁二年後
花園院御獨吟百韻　延德三年後土御
門後柏原兩院御百韻　應仁元年慈照
院殿御獨吟百韻　永正二年兼載獨吟

蘆名家祈禱百韻　大永八年宗長獨吟
名號百韻　賀茂社法樂宗牧獨吟名所
百韻　肖柏獨吟觀世音名號百韻　文
章連歌五十韻　真壁道無追善兼如五
十韻　細川高國朝臣六〻歌仙　出陣
萬句三物　白川万句發句　老葉萱
艸下艸　園塵　春夢艸　壁艸　永
仙句集　荒木田守武句集　神路山

贈從三位元就卿句集　安宅冬康句集
梵燈庵返荅書　袖下集　宗祇袖下
花はまうは　馬上集　薄花櫻　白
髪集　心敬僧都庭訓　同比と是言
連珠合璧集　雨夜記　淀乃和孝里
胸中抄　闇夜一燈　連歌執筆次第
已上六十六種
案ずるに續類從に一千百八十五冊に

〳〵て二千百三種あるものなりいまゞ
上木成就せず〳〵て檢校終焉志をまへ
て法名い和学院前惣檢校心眼明光居
士時に文政五年壬午七月初九日世壽
七十六歳實ゝ去年九月十二日ゟ遠
行なるゆへあり て今秋迫存命の分に
〳〵てをくなるを予も十余年これかゝろ
善友ゝて哀悼をくなゝらず於虚惜哉

問云温古堂ゟ百談乃序ゝ其筋ゝをち
とゝゆるといつり盲人の書にゝゆる
といめゆ荅云後撰集雜一蟬丸ゟ歌乃
云ゝふゞゟ曰相坂の関に庵室をつく
ゝてをみはるゝゝゆきかゝふ人をゝて
といつり見ゝ打もふ屋〳〵
問云蜀山人ゟ茶談乃序ゝ油嶋とかゟ

まるを油の字めゆ荅云北國紀行ゑ油嶋
とこれあり群書類從に載まるなるを
湯れ字にゅきたれども江戸砂子にの
せまるなるを油の字にゅたてゆと假
字を付たるを北國紀行を文明年中乃書
なり續編ゑのまるゞごとし
問云永義れ真字序にを初秋熱月とか
きまるをそのこゝろめゆ荅云南畝莠言

上に曰長崎ゑて竹の画れ賛を清乃胡
兆新ゞ書しをえしにこゼ春抄四月朔
日とありこゼを文化二年なりばとし
四月朔日まで立夏乃節まるあらざる
ゆゑに春抄と書しなるべし面白き書
なるをといつりをゑ準知を爲し
問云百談茶談れをもをの年号乃下れ
壺戸とゞ集ゑ載まる壺戸とを名れゆ

るものかくちなりや荅云をのく
名物なる百談のそうばくちといふ茶
釜なり茶談前編れもいかゝきといふ
茶碗也後編乃もきてんもくといふ茶
碗也續編のい花三嶋といふて茶碗
也殘編れもらんぱう釜といふ名器な
るゆ集に出せる所の纂註子科註子百
談子茶談子白雲堂れ五ゝい茶入なり

正誤子句選子乃二つい香爐なるいゞ
れも一くに名れあるものなり委しき
事ゝ萬寶全書第六巻と第八巻とを見
えきり
問云前よ往く四季二百題といつり其
書いめゆ荅云是ゝ予ゞ三十年來て
ろよかゝ事し四季乃発句集なり凡一萬
余句ゆを今より乃ち再校して宗匠達

れえらひをこそんとそふものなり

○

予が冨士山は四季の発句ならびによしの花乃発句も年久しくこゝろにかゝて案じなれ色をさまる発句なりはたゝよそ不二山のも百四五十句ゞもあるらんゝ芳野はも五十句ばかりをとりなんゝを爰てゝ二百句よをよづり其中を見ふまゝに百三十句かきうゝして里村老人のえらひ状をふて冨士山三十六句吉野二十句都合五十六句を採摘せるなり色を石摺よ志きて初ゝのゝもゞらにあきるを老後乃樂しみよせんとはもへども多事なれべこゝろよまかせずよるゝてゞ紙のあるまゝにまゞ爰よ記しをくも

のなり愚老ゞ執んこれを察とを爾

ふじ山発句春

冨士乃れべうとをみてとを〳〵今新れ去
雪去ろき山もふじ乃相花もなし
作給も及ぶぬ冨士れ雪間う南
時ちらぬ雪もふじ乃相去もなし
目ま雪れもふじ乃る相乃かをみ哉
冨士乃相も雪ようげてまもなし

ふじれ相やふりさもゆろれば薄霞
四方山乃そごゝう冨士れ薄ゞをみ
爾まくのうた霞なりふじ乃嶺

夏

五月雨ようれ冨士れ相をみちの乃を
ふじの相れ雪う都乃氷室山
そびえゝや冨士ようり上に雲れ峯
夕立乃雲も及ぶじ冨士乃嶺

山高し冨士乃裾野も雲れ　みね
ゆふぎりの雲間より高し不二の山
裾野のゝ暑日なれやふじ れ嶽
水無月乃新もふるゝ冨士乃雪
六月れひらも雪うふじの嶽

秋

ふじの根もうゝ紀嶽なれや雪れ海
風まりや雪まり出る冨士乃嶽

秋風の吉いや高し不二れ山
うを雪や立も及ぬふじの嶽
裾野のゝ秋乃氣色や冨士れ山
入月れ名殘やそらにふじ乃嶽
冨士乃嶽一入高し秋のそら
月れ夜やそまる聳し冨士乃嶽
雪高しそらゝ鹿啼ふじ乃山

冬

雪をれて日影まばゆし富士の嶺
面白しうゐをあらたを不二乃雪
真白なりみどりはそまるふじのゆき
もら雲うそらに聳し富士の雪
雪もろきふじもみどり乃俤を哉
ふりをへていはとなすし不二乃雪
ふじをれば雪を常世乃ゑる松ゝ那
四方よりて同じ姿や富士乃雪

ちはやぶるの姿や雪はふじ岩

すゑの〳〵発句

名すゝ花ゝ花乃盛や芳野山
何人ゝ姿も花もすゑの屋ま
ゆふをへや花も一入吉野山
ちるをゑよ花もすゑの山櫻
風ふうぬ世ゝ花なれや芳野山
ちる花乃浪ゝ吉すゝ吉野川

ろれバみな花れ木なれやすゝの山
れくふるれ花もるすゝの山路哉
御すゝのやる柏も埋む花乃雲
幾年うえはてぬ花乃すゝれ山
みすれやもるもちぬも花の友
吉野山こそえ〳〵花れたくもゞ角
花乃浪まれやすゝの川れろ〳〵
御すゝ乃やかくを雲さへ花れ山

志をりせぬ乃こ花ろんすゝの山
いれまでう花乃吉野を旅れ宿
一目まも千なれ花や芳野山
すれ山桜まあらぬ木くもなす
屋まざくらちるや流もすれ川
月夜すゝ吉野乃峯の花れ雲

巳上

又予ゞ乞まで鶴石せ〳〵発句所くまあ

まついでにむさん初瀬山学寮以成る

日は新もふるゝ雲間の夏乃雨

同じく文殊院の南はかゝ乃庭もせに

曇るなる今夜名殘はそ乃月

同じく歡喜院は春日明神の宮乃前る

百年はなゝばも花のくゝろ乃郷

むさゝの宝珠山乃東南は石塔の腋に

清らゝるちるを蓮乃名殘かな

五月雨ゝ雲まゝふるなる西はそ

年はゝやみの乃さゝひ乃玉祭

同じく郷の月讀乃雨ゝろは石碑の末る

神さびゝ木かぎや月の宮所

東都油嶋金剛寶阜はひんがゝ乃芝山に

白雲乃うへも真ゝろや冨士は雪

今朝ゝれぐゝをゝて遠ゝ不二の山

巳上

○むゝし誹諧師蓼太ゞ五月雨れ発句ゟ
さみゞれやある夜ひそゝに松乃月
といふを清人程劍南といつるもの詩
ゟつくゟてゝく
長夏艸堂寂連宵聽雨眠
何時懸月色松影落庭前
といつゝ巳上ゟ南畝莠言にみえまゝり

又予ゞ昔年堺ゟて獨吟一折の連歌ゟ
そゝれて朝日にうごく柳ゝ那
とつかふまゝ〳〵ゟ発句をそのゝち長
崎ゟて異朝れ江芸閣といふ人からう
きにつゞゟてかく
雨晴テ宿雲散ス日出ヲ曉風吹ク
寂ク芸牕ノ下緑楊弄ニ嫩キ絲ヲ
といつゝ案ずるゟ此詩ゟ発句れ姿情

と聊か異なれども唐人乃所爲なれ共
づらしくれば寛に寫置ものなり

○

戊寅臘月より油嶋まで七年をへ侍りて
とし〳〵の春夏秋冬ながめかたる
景氣をうるに其境内さなれぬ鶯あ
まてはかねもたいをなくもあかねさ
を知日乃出る比すりゆふつゝまで

ひねもす木陰ひ涼てこゝろをなぐさ
免殊まこれわまてまろうぐひをまむう
し京都すりくぐしたるきの事ねまて
なくこゑも色音も一入あざやかにう
るはしくきこゆるゆゆ侍めるなり又
夏まうれば時鳥きまてひさかま
れをを飛かふなりさま餘所まことな
まて事ぐ事をきくのみならず姿も度〳〵

みえぬ雨のふるまもはるくにも雲路
を啼きれば日くにとゝのゝしてうちあふ
むき半天をなゞめくらしていと面白
くこゝちよき風情なり又秋はなれば
ちりをろわるきてあまられ隅田
川のほとゝぎす遠くこえやれば行したは
ま川上へゆきゆゑ色にも川下へゆき
いくつらとりふうぎりもなくひとり

らは二十羽三十羽づゝはらもみぐれ
ず飛わるをて繪はかくともゐぶまで
き景色にてあさ那ゆふなはえわるし
てれいをやしなふ者をけともなれを
ちり又冬はうれれば上野乃池れ面は
水多かずくなりまりてれりたれまで
しき目のまへにえれろして佳景いふ
ぢうなし誠は宝阜いろゝをなぐ

さゑれい城屋しなひ杖もたろふ樂し
て老人乃保養まるまるとなりたよろ
しき栖うなりその時くにまんで発句
もなのまるあれどもたゞらく一句づ
愛ま出しをくものなり
うぐひものちりもや窓れ新日新
作きろんなうぞらま新く郭公
飛鳥をあさ新ゆふなの孫先か那

水色れうぐまなたつ羽青うの南

巳上

○

老衲もはやことし古稀乃年まなんく
として露れ命のきえうせん程乃遠う
らざる庵き事を想像てさらべうろ
みま辞世れ発句をつくらむやと欲し
て案じるに春夏秋冬の四季乃中ま

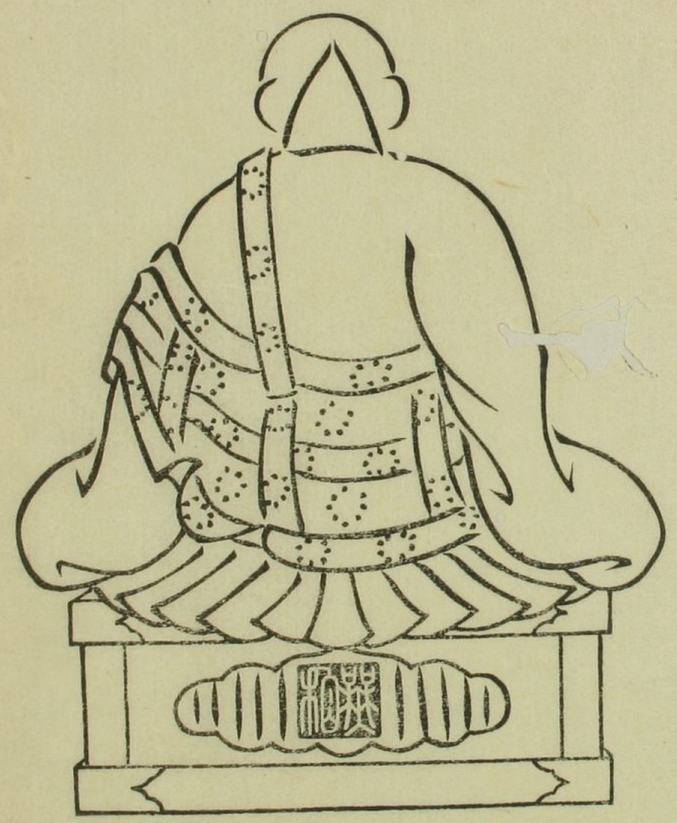
きいづれの時にゝ息れ緒乃者えなん
こともはうるがゝとりれでいゝぐゝいせん
と思慮を免ぐらをとるれもへらく四季
にをの〳〵一句づゝ作らでいづれゝ
辞せるならざらんやゝとれもひな〳〵
て案ゞ出せる四季れ発句

いきのをれたゆるき苑乃木陰ゝ昭
息乃緒の者ゆるき夏れ川逸かも

いたれをろたゆるき月のゆふべ哉
息の緒れ者ゆるゝ雪乃可〳〵たゝ郎
これを面りうれ命終の〳〵ちまえたま
はん人〳〵き機根萬差なれべまを拍て
笑ふものをいるべし〳〵足をきてかな
きふをれもある面し〳〵麁言輭語第一義
諦なれでいづれもわゞ者免乃廻向人
なら羅うも定賢〳〵く

又二十四五年よりもなるらんを豊山よ
て大病わづらひしころ寂期れ画賛を
かきて弟子どもにあたへをたしゞ観
世音乃利生よや其度をたをかゞ今に
なゞらへてなるらんその時乃画賛も
ちなみよろしをくものなり

生レ之キ死ニ ハテ 哭シレ之ヲ 笑フレ之ヲ
笑ヒ哭シ死ニ 生レ之キ 之キ 之キ 之ク



○在原業平乃辞世れ歌伊勢物語巻末ヨ

はねゝゆく道とハうねて学しかど

きのふゝふとハ思ハざりしを

歌註第三ヨ曰古註にきのふまでハゝふ

とゝもたもはざるし城と云てゝゝろあ

まりて詞をらぬ歌といつり當流ヨハ

うちまかせてきぐきのふまふとハ思

はざりしをといつりまことヨあもれ

もふゝくやゆるゝうんゝれ世上れ人ご

とのゝゝろなるべしたゞそのまゝな

るをしかへをぐ知べくこそゆゝ先

といつり

又寂明寺時頼れ辞世乃頌東鑑第五十

一巻ヨ曰葉鏡高懸三十七年一槌打砕

大道坦然といつり

○予先る續門葉集の第十かゝまるなを閲してそのおもむきを茶談前編に終にあるせをそのくち山州名跡志をえる續門葉集第十卷に十住心乃中の第一に住心乃歌をのせてあるこれにより群書類從に載るなを一覽をる第十にあり其中に第一の住心

より第十乃住心までに歌あるを今志らく初中後の三首を爰に出さん

第一異生羝羊心に中に三辰戴頂暗同狗眼といつるこゝろを

さとらゝ那の光いてらせとも
なをそのうへもくらさんを

權律師頼驗

第六他縁大乘心乃中に唯識無境のこゝ

ろ城よ名る

権少僧都道順

爰れ世よろこることいみなむなくて
んひとりそまことなるまろる

法印頼瑜

第十秘密莊嚴心れころまて生死涅
槃といつることを

世の中をいとふつてもゆ免なれい

さなから爰そうりくなりある

同第九巻雑部ま曰先師僧正成賢にを
られてのち彼あと報恩院まこもりぬ
て年月をかさねてをこなれろるこ
ろ人のもとよりをとづれ仕まある返
事まそへはりろる

権僧正憲深

志ての戸に人めをいとふ身なれとも

とふいさをつまうれしかるらん

又僧正成賢より弟子どもの中へつゝ
をしゝる歌

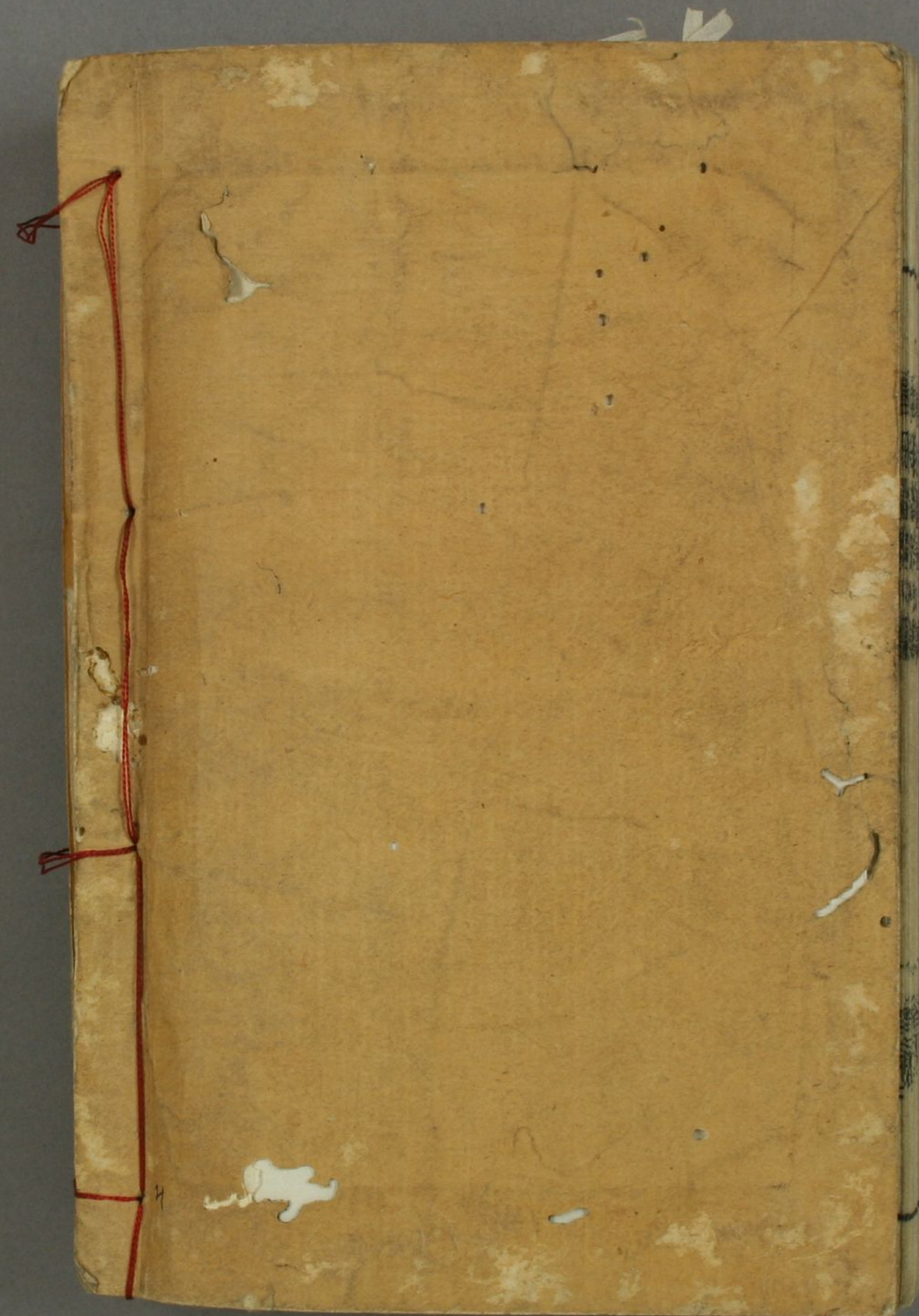
ちぎりをくこの世なくとも義の身は
はえなん後もあとをまつねよ

又大僧正聖兼岡屋前攝政より臨終は大
事をもとゝ免たてまつりまるる時に捨を
ゝてよゝまる歌

今もとてはちりもとゝむるかねの音は
きえぬときくやうはつをなるらん

又意教上人阿弥陀院の池はは一名乃
歌くなるゝる時あらぐぶりの五字を
句はかゝらをきてよ免る歌

あもれなりみきはのはゝも波は
ふちせにうもるつゆ乃わうれゝ

亥政八年
睦月之吉

茶談抜後續殘部集共成五卷